Organo de Hokkajda Esperanto-Ligo

LEONTODO

N-ro 50

7 - 1973

LEONTODO 雑感

高橋 達治（清水市）

50号記念特別寄稿

Leontodo が n-ro 50 きだすから ―― と s-ro 男王に教えられて、ああもう 50号か…… という気にもなり、同時に、すったもんだの 50号であったな、という感じもする。 Leontodo には 50号だから発行○周年であるというような n-ro と tempo のかかわりあいがとぼしい。それはいかにも Esp 地方誌らしい、定期刊行もできない、四苦八苦的産物であるのである。それでは Leontodo の発刊はいつか？ …… ということになってほこりにまみれたダンボールの底をまさぐって N-ro 1 を拾いだしてみた。 黄のわるい当時のガラ紙は もはや黄ばんだというよりは いきさかくちずんでいるが 発刊は 1952年 ― Julio とみる。 すると あの年から もう 21年もすぎたのかという ためいきと、20年前のいきいきとした思い出とが、どうにもならない力で 私を茫然とさせてしまう。

たちまち 21年前の小樽公園の 樽の木の新緑がうかんでくる。私が Esp を学んで 3年目、忙しい n-ro 山賀の代りに、公園の中にある小樽市立図書館で 初年講習会を qvidi しはじめた頃である。講習会には 12, 3名の kursanoj が集まり、私は とにかくも その日の kurso を無難にすすめて行くことで手一杯というところであった。 私より Esp 一年先輩の s-ro 土田が毎回会場にあらわれて 私の説明不足を補ってくれた。 その s-ro 土田の親友として

現れた S-ro 山本は ne audebla にしてEsp. を理解した diligentulo で私には二人ともEspによって konatigi した はじめての友人であり、同時に尊敬できる kamardoj であった。その講習会の帰りから S-ro 山本が小樽Esp会のための Literatura gazeto をつくろうではないかといいだしたのである。"ne organo, sed gazeto literatura!" と彼は力づよくいった。"Leontodo esta gia nomo." とつけ加えた。雑草のように繁殖力がつよく、北海道の初夏を象徴する黄色い花は、一瞬強烈な太陽光の下で金色に輝くようだった。

S-ro 山本の家は住吉神社の裏手の高台にあって、部屋住みの彼はその家の屋根裏の一室を Leontodo 発行のための laboreja としていた。その頃彼はトーン印刷の技術を習いはじめ その練習のためにも gazeto を出したいと考えていたようだった。

原稿あつめがむずかしいのだ —— といっていたが、それは杞憂であった。彼の熱心さにはみなが感服していたし、自分の skribaĵo を印刷して本にのせてもらえることを果敢に喜べる時代でもあった。N-ro 1 には 山頂、早川、前田、上田、中沢、高橋、佳山 といった当時の aktiva を Otaru-anoj が投稿した。N-ro 2 の表紙から口絵刷りとなった。N-ro 3 になると寄稿者はもっと広く Leontodo は全道的に、いや本州にもくばられ名声を広げることとなった。N-ro 5 からは Sapporo-anoj もどしどし寄稿してくれたし、朝日賞賞のような Hokkaido-anoj も投稿するようになった。N-ro 6 からはじまった 相沢の「螢火」、朝日賞の「流星の曲」などが連載でかなりの反響があった。

はじめから S-ro 山本は「隔月刊行」を deklaro していたが、少くとも N-ro 10 までは その線がくずれなかった。

第40回日本大会ではユニークな地方誌としてpremioをうけたが、同時HELのesp運動とはまりはなしも考えられない存在になっていた。第18回HEL大会でLeontodoを正式にHELの機関誌とすることに決定し、Leontodoは山本俊人の手からHELの機関の中にはいり事実上は坂下HEL会長を中心とするSapporo-anoj の数人の編集委員会にバトンタッチされたことになる。

第4回刊行を目標として活動がすすみ、Sapporo-anoj は原稿をとりまとめ S-ro 山本のつとめる高文プリント社に印刷を依頼した。特に表紙については S-ro 山本が引続き印刷を色刷りでやってくれたから美しい Leontodo の伝統がそのままのこった。n-ro 11, 12, 13 と、予定コケシュールどおり発行され内容的にも S-ro 相沢の連載もの「理火」をはじめすぐれたものがあり、同時に HEL-kongreso、その他運動関係のことの記載もあり、Leontodo を中心としてHELの運動がまわりすすんでいることがわかるようであった。

しかし n-ro 14 頃から発行のおくれがめだってきた。この頃、S-ro 坂下の編集後記に、毎回原稿の寄稿についておねがいの文が記されているにもかかわらず、それに応ずるものが少くなってきた。考えてみると S-ro 山本には特性ともいうべき一流のしつこさがあって、原稿の要求をどやしつけたし、彼の工場に滞留してようこんで寄稿するものが多かった。

ところが量をかせぐ、それがHELのものとなってしまうと、何となく安心感というか、誰かがやるだろうという依頼心というか、そういうものがいささか流らいでいたのかもしれない。「Leontodo は半年刊だ、

年刊が」という批判を生じはじめたのである。

印刷資金についても Leontodo ははじめから問題があった。小樽Esp会が Leontodo を発行しえたのは、もちろん s-ro 山本自身の個人的でかつ積極的な努力によるものであるが、d-ro 山賀の経済的援助によるところが大きかった。

HEL 機関誌とすれば多数の ges-anoj が abonantoj となってくれるものと期待されたが、必ずしもその数は多くはならなかった。しかし会費納入者の多少にかかわらず 100部程度の最小限部数は印刷しなければならなかったし、本州の Esp-grupoj やその他の人に配布することも、値上りを時々実施した郵便料にも困ることが多く、いろいろな機会で、d-ro 山賀をはじめとする方々の donac-mono が abonokotizo の不足をカバーする事態が多かった。

N-ro 15-16 が n-ro 14 の直後に送られたが、こうした numero のとびかたはどうかなと思っていたが、やがて、この duobla numero も発行回数がへり、まったく「年刊」以下になってしまった。s-ro 坂下のご病気もあって、1960年の Januaro, n-ro 23-24 で sapporo 第1期の Leontodo が終り次の n-ro 25-26 は等外数から出された。1962年以降私が HEL 事務局を受けるようになり n-ro 27 号以降の発刊にあたったが、s-ro 坂下が感じたなやみをそのまま受けついだようなかたちとなった。特に引継時に資金がなく、n-ro 27 は自分自身の手刷りとした。さらにまた私の重病症から s-ro 植木國勝の意見をとりいれて "Informilo de HEL", "Norda poluso" などのような Informilo をつくってみたが Leontodo に対

事をまとめて出した方がよいという意見が大きかったので その発刊をとりやめ 以後は年1、2号程度の Leontodo 発行を続けた。

1965年、東京で世界Esp大会があり また1968年の日本大会を札幌で開催することになり、このような大きな仕事をかかえて、その動きを説明し、JHEL会員の力づけとすることには Leontodo の力が大きかったのだが、そのような大きな行事の遂行のために働いたことと、Leontodo 発行の仕事を両立果すことは、私にはいささかエネルギー不足であった。 n-ro 36, 1967-Majo が私の Leontodo 発行の最後となった。その年12月 翌年の日本大会開催に心を残したまま 小樽を去ることとなったからである。

いま Leontodo n-ro 49 を机上において 私はさまざまなことを考えている。

もし誰かが 北海道エスペラント運動史をかくとしたら、Leontodo の発行こそまことに大きな史実となろう。またそれを記録は少くとも 1952年以降の北海道エス運動の実情を Leontodo によって学ぶだろう ——などと。

それから、n-ro 37 以降は sapporo 時代の第2期ということになるが 私は s-ro redaktoro 沢谷を中心とする若々しい人達の働きを敬服している。そこにはまず相当数の aktiva ĵunulo の息づきが感ぜられる。Leontodo の発行はやはり多数の人が協力してやらなければいけない。なぜなら それにかかわりをもつことによって それにかかわりをもつ人が 少なからぬ刺激を互いに与えることができるからだ。私が Leontodo を出している時 疎遠ながら helpanto が多く、一人で編集し、一人でガリをきり、一人で封筒かき

をした。そういうとき S-ro 山本が n-ro 11 の「編集引継かせのことば」の中に書いている述懐を思いおこす。「私にはここまでまるにはずいぶんつらくて毎号ごとに出すごとに1週間くらいはぼうぜんとして何もできないのだった。この春失業するまで私は荷役人夫をやっており、疲れて帰って原稿をかいたり、刷ったり製本したり、全く夢中でやった。レオナードが以前はエスペラントの翻訳などもやり一人で合点して面白がっていたが、レオナードをはじめてからエスペラントの勉強は急速におろそかになり、印刷業の向上にばかり熱中してしまった。これは本末転倒であるといつも思い、同志にも指摘され、そのこころから せめて編集と合冊だけでも誰かにやってもらいたいものと思うようになった」一人、または少数の人達だけでやると、こういう気持になるのはどうしてもさけられないと思う。

それから和文タイプを買うとか、エスペラントの表をつくるとか、前の手あたりにあったが、これからは資金に困るようなことがあれば どんどん募集して多数の人が資金を出し合うことが必要である。その点でいまの若い人はあまり遠慮せずに資金の募集をすべきかけるのがうらやましいと思う。(――それはよいことです。)

表紙が色刷りでないのはやっぱりさみしいが これは経済的によいことだし内容もみてもaktivaを動きが感じられ、今度のHEL-kongrese には ぜひでてみたい気持にかられる。

とにかくもLeontodo が50号を数えたということでHELの発展を祝い、同時に苦労にみちた日々をも思い起こしながら、HEL会員各位に編集者の負担などを十分くんで協力してもらいたいとお願いするものである。

HOKAJDOO ワ イカガ?

アリマ ヨシハル（サイタマケン）

LEONTODO N-ro 48(1972-Dec.) 14 ページ ノ Aizawa - Haruo サン ノ 「Hokkajdo ト ユー ヒョーキ ニ ツイテ」 ヲ ヨミ，ムカシ ワタシ モ Aizawa サン ト オナジ カンガエ デ， 「Hokkajdo」 マタ ワ 「Hokajdo」 ト カイテイタ コト ヲ オモイダシタ．

Aizawa サン ワ 「Hokajdo」 ノ カタチ モ カンガエテ ミタ ガ 「ホッカイドー」 ノ ハツオン ニ トーザカル ヨー デ，ツカッタ コト ワ ナイト カイテ オラレル ガ，Esperanto ニワ Hokk ト ユー ソクオン ワ ナイシ，Okamoto-Koozi センセイ ノ Nova Vortaro, Japana - Esperanto ノ 737 ページ ニ Hokajdo, Hokaido ト アラワシテ オラレル ノデ，ワタシワ Hokajdo ヲ ガイコク ノ Samideano ニ ツカッタ．

1958ネン ニ Jugoslavujo, Beogrado ノ Internacia Instituto por Oficialigo de Esperanto カラ ハッコー サレテイル 「MONDMAPO」 ニモ 「Hokajdo」 ト アラワシテ アル．

トキニ Italo ワ ベツ ト シテ セイヨージン ノ ダイブブン，ソレニ Ĉino モ ソクオン ノ ツマル オト ワ ダシニクイラシイ ノデ，Hokkajdo ヨリ ワ Hokajdo ノ ホー ガ セカイテキ ダト イエル．

ソレカラ Japana lingvo ヲ Roomazi デ カク トキ ホッカイドー ノ 「ドー」 ノ ヨーニ ヒキノバス オト ニワ ô, ō ノ ヨーニ ^,- ノ フゴーヲ ツケル ヨーニ ナッテイル ガ， イッパン ノ ヒト ワ ノバシ~フゴー ヲ ツケル コト ヲ コノマナイ．

La Olimpiko en Ŝapporo ノ トキ Urbo Sapporo ノ アチコチニ 「YOKOSO」 ト カイテ ハッテ アル ノヲ ワタシワ ナンノ コト ダカ，ヨク ワカラナカッタ．ダイブン タッテ カラ 「ヨーコソ イラッシャイ」 ノ Yookoso デ アル コト ヲ シッタ． ガイコク ノ Ĉampionoj モ ハジメ ワ 「ヨコソ」ト ハツオンシテ ナンノ コト ダカ，ワカラナカッタ ヨー ダト トージ ノ Ĵurnalo ガ ホージテ イタ．

Japana lingvo ニワ ノバス~オト ガ オーク，ノバス ト ノバサナイ ト デワ コトバ ノ イミ ガ チガウ ノデ ノバス~シルシ ワ オロソカニ デキナイ ジューヨー

ナ モノ デアル. ダカラ â, ā ノ キゴーシキ ヲ ヤメテ kaasan, tiisai, kyuuyo, neesan, soohyoo ノ ヨーニ ボオン ヲ フタツ カサネテ, ショテン, ショーテン モ syoten, syooten ト カキワケ, ショージョ ト ショジョ ト ショジョー ト ショージョー トラ syoozyo, syozyo, syozyoo, syoozyoo ト ハッキリ カキワケル コト ニ スレバ ヒキノバシ ノ キゴー ヲ ツケワスレル コト モ ナク アンシン デアル.

ナオ Hokkajdo ト カケバ Esperanto ノ akcento ニ ヨッテ「ホク.カーィ.ド」ト ゴビ ガ ノビナイ ガ, Hokkajdoo ト カクト「ホク.カィ.ドー.オ」ト ハツオン サレテ「ホッカイドー」ニ チカク ナル. Hokajdo ワ「ホ.カーィ.ド」ト ナリ, Hokajdoo ワ「ホ.カィ.ドー.オ」ト ナル.

マタ Matuba-Kikunobu センセイ ワ「ワブン エスペラク ケンキュー」ノ 168ページ ニ「Esperanto シキ ナラ Tookjoo ガ イイ ダロー」ト カイテ オラレル.

50505050505050505050505050505050505050505050

Postpostskribo

* Tuj post redaktado de ĉi n-ro 50, nin atingis du manuskriptoj por nia organo, tiel bele manskribita aŭ tajpita, ke ni povu rekte transdoni al presejo la manuskripton sen retajpado, kaj ilin ni prezentis sur la paĝojn kun minusaj ciferoj.
* Laŭ la artikolo de s-ro Takahaŝi T, mi sciigis, ke nia Leontodo n-ro 1 estis eldonita antaŭ 21 jaroj, kiam nuna redaktoro estis ankoraŭ 5jara infaneto... kaj eble kelkaj el nunaj membroj de nia ligo ankoraŭ ne venis en ĉi tiun mondon..... (S.)

ENHAVO aldonita

		PAĜO
-2. Leontodo 雑感	高橋建治	-8
-1. HOKAJDOO ワイカガ?	アリマ ヨシハル	-2

Baldaŭ aperos..... ただいま準備中

発売元 HEL

KANTARO esperanta n-ro 1

札幌の samideanoj が中心になって, 8月の大会に発売する予定. 新しく訳された歌もあります!

RILATE AL " Ruĝverta Gruo "

Inoue Hisasi (Hakodate)

Inter demando defendi kontraŭ ruinigo de Naturo estas, kiel unu parto, protektado de " Ruĝverta Gruo " en " Kusiro Marĉeja Kampo ". Sed jam de longe, alivorte de longa antikveco en ĈINIO estis samsignifa konsidero, kiun jam nun per Nacia Politiko subtenas forte tian prizorgon, kaj tio jam fariĝis popola komuna saĝo t.e. NATUR-DEFENDO en la flanko de raraj birdoj kaj animaloj.

En la lasta (Maja) N-ro, de " EL POPOLA ĈINIO " mi estas fiksita rigardon al belan kolor-foton kune kun ĝia klarigo presata en malsupra parto de la foto per blankaj presliteroj. En la konsisto de la bildo speciale akcentita estas 2 gruoj starantaj sur roko apud akvejo. Ili havas belajn elegantajn figurojn.

La klarigo estas jena :- "Ruĝverta Gruo (Grus Chinensis Crane) estas rara birdo de nia lando. Ĝi vivas en la Nordoriento kaj la marbordaj provincoj en suda ĈINIO, ĉe rivero, lago aŭ en marĉo kaj manĝas fiŝojn, salikokojn kaj insektojn. Ĝia korpo plej parte blanka estas relative granda kaj ĝia kolo tre longa. Ĝi ricevas sian nomon pro la ruĝa tubero sur la frunto. Pro sia svelta korpo kaj sonora bleko, de longe ĝi estas rigardata de nia popolo kiel fea birdo kaj estas nomata ankaŭ per fea gruo. Ĝia vivo longas je 50 ĝis 60 jaroj, tiel ĝi estas uzata kiel simbolo de longviveco,kaj servas kiel temo de multaj versaĵoj, kantoj kaj pentraĵoj de la antikva ĈINIO. "

Ankaŭ en nia lando, precipe en Hokkajdo, " Ruĝverta Gruo " (Megalornis Japonensis), kiu apenaŭ nuntempe

elektis loĝejon kutiman laŭsezone en " Kusiro Marĉeja kampo ", kaj en tie estas rigardata de ĝia generado.

Estas tre multaj protekto-distinitaj de la registaro naturmemoraĵoj en nia lando, sed " Ruĝverta Gruo" jam de longe ne estas monopolaĵoj de Hokkajdo kaj en Japanio. Mi tion konsciis la unuan fojon de la interna flanko de la dorsa-kovrilo de " EL POPOLA ĈINIO".

Mi enmembriĝis de la komenco de organizado de Sud-Hokkajda Natur-Defenda Asocio, kiu ne estas apartenanta al " Hokkajda Natur-Defenda Asocio ". Nia organizo (Asocio) estas unu sola sendependa organizo en Hokkajdo, rilate al Sapporo, kiel centro de sama organizo. Sed tamen nia membraro pririgardas ne nur naturan ŝanĝon en Sud-Hokkajdo, sed al Tut-Hokkajda Natur-Ruinigo. Ni ĉiam tre atenta al la ŝanĝo (Ekologia konsidero). Nia asocio sukcesis ŝanĝigi la projekton de Urbaj Aŭtoritatuloj rilate al " Rondoira Vojo " (por aŭto) de " Monto Hakodate " (Hakodate Jama).

Nia motivo estis defendi kontraŭ ruinigo de la naturo de " Monto Hakodate ". Ankoraŭ pli multaj demandoj estas naskiĝantaj en Sud-Hokkajdo. Tiujn ni nepovas kalkuli ĉi tie pro abundeco de la aferoj. Estas nia devo efektive organizi la loĝantaron por kelĥ kontraŭu ruinigon de natura cirkonstanco de la ekologia vidpunkto. Detruo de HOMA, Natura cirkonstanco (ekstere socia demando) rezultos finfine kompleta pereo de la Homaro. (nova ekologo de multaj landoj entuziasme esploras pri tia demando , kun firma solidareco, unu la alian.) (fino)

IOMETE PRI LA4-A ATAKA PLANO

La Revulo Orientanta

Antaŭ ĉio mi dankas al S-ro Hisasi Inoue en Hakodate, kiu skribis tre favoran opinion pri mia aĉa artikolo aperinta en la 48-a numero.

La esenco de S-ro Kakuei Tanaka jam vaste konatas inter la popolo. Tiel mi konkludas de la rezultato de la lasta ĝenerala elekto, pro ke Japana Socialista Partio k Japana Komunista Partio venkis en ĝi kaj gajnis seĝojn pli multajn ol antaŭe.

Sed la 11-an de lasta Decembro, la sekvantan tagon de la ĝenerala elekto, frumatene kaŝe enportatis la misiloj en Naganuman Misilan Bazon, kiu Bazo konstruitis kiel la simbolo de la 4-a Ataka Plano (aŭ Defenda Plano). Kaj oni diras, ke la misiloj uzeblas jam de ĉi tiu jaro. Plue (mi perdis eltranĉitaĵojn, do ne precizas) ĉi Januare la imperiistoj publikigis la planon, ke ankaŭ en Jakumo ili konstruos la 2-an Misilan Bazon.

Kiel ni komprenu ĉi tiujn faktojn k realon? Kaj kion ni faru kiel pacamantoj, kiel filantropoj, plie kiel socialistoj k komunistoj? Mi opinias, ke ni devas ne eviti ĉi tiun problemon kiel esperantistoj loĝantaj en Hokkajdo.

Vidu la sekvantajn ciferojn!

PRI LA DEFENDAJ PLANOJ

	SUMO (10 enoj)	JARMEZNOMBRA SUMO (10 enoj)	ŜULDO PO UNU HOMO (enoj)
la 1-a DP (1958-61)	6,548	2,182	1,687 (1960j.)
la 2-a DP (1962-66)	13,946	2,789	2,855 (1963j.)
la 3-a DP (1967-71)	25,402	5,084	4,821 (1969j.)

la 4-a DP (1972-76)	51,000	10,200	7,700 (1972j.)

PRI MILITAJ ELSPEZOJ DE KAPITALISMAJ ŜTATOJ

	JAPANIO	USONO	ANGLIO	OKC.GER	FRAN	ITA
Kresko dum 1961-71 (oble)	3,7	1,6	1,3	2,1	2,1	2,2
Kreskporcio jarmeznombra (1966-70) (%)	13,3	2,3	2,3	9,0	7,1	5,0

Kiel vi opinias traleginte tiujn tabelojn? Kaj kien iris la mono uzata kiel Defenda Elspezo en la lastaj ĉirkaŭ dek jaroj? Tiu mono iris al la Armil-monopoloj kiel tri diamantoj sangokoloraj (aŭ oni ofte nomas tion Mucubiŝi-Ĵuko), kaj ĝi ludas la rolon de akcelilo de inflacio.

Ankaŭ ĉi tio fariĝis malnovaĵo, ke vjetnama milito fine aspekte finiĝis. Kvankam restas multe da problemoj, tio estas ĝojinda por ni, simpatiantoj al la vjetnamaj amikoj batalantaj kontraŭ usonaj imperiistoj. La honoro de Usono, la ĉefo de imperiistoj, jam teren falis, kaj ankaŭ la valoro de usona dolaro tute falis; la krizo de Kapitalismo ankoraŭ daŭras. Estas mez- etskalaj entreprenoj, kiuj batatas per unudirekta devaluto de usona dolaro. Kvankam tio nenian agon faris kara konstruentreprenisto. (Lastatempe la amaskomunikoj ne favoras lin, al mi ŝajnas.) Kaj pri la troaltiĝo de prezoj de sojfaboj k lignoj nenian efikan kontraŭplanon fari povis li. Do, nia devo estas:

FOSU TOMBON POR ĈEFMINISTRO KAKUEI TANAKA!!!!!

連盟委員会報告

3月11日 九曜荘にて

出席者：高橋、沢谷、木村、児玉、新田、石黒、北島、屋田

1　1973年の年間活動計画について

連盟の主催するおもな行事は、北海道大会（8月18、19日、小樽朝里川温泉）、秋の強化合宿（9月15、16日、場所は昨年と同じく札幌市真駒内の道青少年会館が有力候補）、それに12月の全道ザメンホフ祭（TERO の同意が得られれば、昨年と同じく、VERDA DOMOで）小樽、札幌、そして千歳で、それぞれ開催することによつて、できるだけ、近隣ロンド間の交流をはかるよう心がけたい。

◎　北海道大会の開催において、大会の主催は、あくまでも、連盟であつて、大会プログラムなどの準備、大会の内容については、連盟委員会が責任を持ち、開催準備を引き受けたロンドあるいは会員には、会場の確保、宿泊の手配など実務的仕事だけ担当してもらい、大会準備委員会の仕事を軽減することが確認された。（したがつて、極端な場合として、会場と宿泊の手配、確保を izolita membro にしてもらえるならば、大会開催地は、ロンドのある都市でなくともよい。）

◎　秋の合宿については、早いうちに責任者を決め、合宿準備委員会を結成し、合宿の内容、講師など細目にわたつて準備、検討してもらう（次の委員会で発足）

◎　秋の合宿、Z祭は、次期の連盟役員に実質上引き継いでもらうので形式的には、大会で承認決定ということになります。

2　機関誌 Leontodo　の発行について

6月中に50号を記念して特集を組むほか、大会前（7月末）に Kongreslibro もかねて、大会関係の記事が主な薄いものを、9月に大会の protokolo として52号を、12月のZ祭の前に53号を出すよう努力することが確認された。（51、52号は informilo としての性格で、部厚くしない。）

3　北海道大会について

今年の大会の内容、また運動全体からみた位置づけと目標、具体的なプログラムについて次回の委員会を6月23日（土）札幌市で開く。

北海道エスペラント運動史の覆刻について

相沢治雄（札幌）

昭和7年（1932）8月第1回の全道エスペラント大会が山部で開催され北海道エスペラント連盟（当時は聯盟）が結成されてから、北海道で地方エス大会が開催される事36回、その間すでに40年の才月が流れております。この長い年月の間、道内のエス運動がどうであつたか、どのように変つたのか、戦前と戦後の運動にどのような変化があつたのか、これ等の事は北海道エス運動史として長く記録されなければならない事だと思います。

戦前のエス運動については幸い連盟で昭和10年（1935）に編集した「北海道エスペラント運動史」（北海道エス運動小史と呼んでいる）がありこれについては46年第35回（苫小牧）の全道大会の協議会でその復刻が協議されましたのでそのうちに再版されると思いますが、その内容について少々説明しておきたいと思います。

最初に当時の熱心なエスペランチスト佐藤徳治君の作製した北海道エス運動年表があります。北海道、日本、国際との三つの運動を対照させたもので今では貴重な資料です。明治年間、大正の初期の運動については決定的な資料がなく、大正8年（1919）2月、北大エスペラント会が結成されてからの分については、年月日を明らかにして作製されておりますが、これは運動史の本文（各地方から持ちよつた）から摘出したものであります。

本文の内容は、札幌、函館、エス普及北海道本部（山部）、苫小牧、小樽帯広、旭川の各地方別になつており、原稿は各地方会から提出してもらいました。函館の分は私がまとめました。編集当時いくらかの運動があつたと思われる釧路、根室、室蘭については、昭和4年から9年（1924～1934）にかけて、エスペラント普及会がそれぞれ1、2回の講習会を開催しエス会も結成されたにもかかわらず何等の記録も残つていないのは残念なことです。

各地方会別の編集者並びに記録に表われた年代は次のとおりです。

地方名	運動の記録ある期間	編集者
札幌	1904～1935	相沢治雄
函館	1921～1935	相沢治雄 R.O その他から収録した。

エスペラント普及会北海道本部	1928～1934	中村久雄(?)
苫小牧	1906～1934	不明
小樽	1904～1934	渡部隆志 小樽エス協会辺見氏の記録に基づく
帯広	大正年間～1934	不明
旭川	1904～1935	竹吉正広

また、このエスペラント小史は、昭和8年（1933）札幌で開催された第2回北海道エスペラント大会で当時苫小牧におられた渡部隆志先生から提案あり可決されたものです。当時の大会記録からその分を抜書して見ましょう。

協議会決議事項

1

2

3　北海道エス運動史編輯ノ件

苫小牧エス会　渡部氏提案

相沢氏ヨリ「該運動史完成ノ後ハ其レヲ印刷物トシテ発表スルヤ否ヤ」トノ質問ニ対シテハ渡部氏ヨリ発表スル意思アリトノ答ヲ得タリ。尚中村氏ヨリ「会員ニハ実費ヲ以テ頒布シタシ」トノ言アリタリ。

運動史編輯ノタメ下記ノ如キ委員ノ決定ヲ見タ。

委員長	渡部隆志	
賛助	中村久雄	（山部）
委員	相沢治雄	（札幌）
〃	小田島　栄	（函館）
〃	福田仁一	（小樽）

その後各地方会から原稿又は用紙に印刷されて聯盟本部にまとめられ、1935年11月20日印刷納本（当時印刷物はすべて内務省に届出をしなければならなかつた。）12月1日発行となつております。

以上のように非常に貴重な資料であるにもかかわらず、今では道内でその保存が確認されているのが二、三冊にしか過ぎません。日本紙に小さなガリ刷りをされていますので、タイプで復原するには大変な苦労だと思いますが是非完成していただきたいと念ずる次第であります。

ザメンホフの生地ビアリストクについて

trad. 江 口 正 元（札幌）

N. Z. MAIMONによつて書かれたU.E.A雑誌"esperanto"12月号(1972年)の"BIALISTOKO"の記事を深い感銘をもつて読んだ。そして、あえて拙訳を試み、これをLEONTODOに転載を思いたつたのは、未だ初心者である私の訳文にご批判をいただきたいと願つているからであります。

ビアリストク市は、リトアニアのポーランド領内にあり、ザメンホフが、1859年の誕生以来1873年の幼年時代を過ごしたところである。

彼の生家は、ユダヤ地区の通称ヤツケ・ガス通り（肉屋通りの意）にあつた。もつとも、この通りの呼び方は、1919年以来、ウリカ・ザメンホフ（ザメンホフ通りの意）と変つている。当時、ヤツケ・ガス通りに建つていた建物はすでに姿を消しており、今もなお残つているのは、彼の生れた家だけである。

この地の歴史は、14世紀にさかのぼる。ビアリストクの名称はBiaiy（町の中を流れている小川Blankaのこと）とstock（町をかこんでいる樹木の茂つている小さい山）の二つのことばが一緒になつたものである。

それから500年たつて、ビアリストクは工業の町になつたが、上にのべた川と山の二つの自然のおかげで、汚れることもなく、町は工業活動による日常生活の単調さをやわらげ、落着いたたたずまいをみせていた。

この町は、とくに人々の興味をひく歴史はないが、ザメンホフ誕生の地として有名になつている。

1	リトアニア時代	1320年 ～ 1665年
2	プラニッキ 〃	1665年 ～ 1795年
3	プロシヤ 〃	1795年 ～ 1807年
4	ロシア 〃	1807年 ～ 1915年
5	ポーランド 〃	1919年以降

1320年リトアニアのゲドミン公が、この地に村落を形成し、1665年ポーランドの貴族プラニッキ家の所有するところとなつてから、発展し始

めた。

1742年には市となり、言い伝えによると、その頃ブラニッキ伯がこの地へユダヤ人の移住をすすめたとのことである。

1835年、第1次の織物工場の建設によつて、町は発展することとなつた。その後もさらに繁栄をみ、人口も年々増加した。

ザメンホフが生れた1859年12月には、ビアリストクは、中工業都市にまで発展していた。1860年の統計によれば、総人口16544人で、その68.3%に当る11288人がユダヤ人であつた。大多数を占るユダヤ人が、町の推進母体となり、彼等が中心となつて、力強い工業にまで発展させたのであつた。

ロシア政府は、ビアリストクをポーランド領の境界に近い第一拠点として注目していた。そのため、ロシア政府は、この町の工業に好意的でありローズ市の工業に対抗して支持してきた。特に、1863年のポーランドの反乱後は、その支持を一層つよめた。

1859年には、ビアリストクを経由するワルシャワ・ペテルブルグ間の鉄道が開通し、さらに1867年には、ビアリストク・プレスト間の新しい鉄道が建設された。町はいよいよ繁栄を続け、織物に関する商工業の中心として、モスクワ、ローズに続く第三の町となつた。

1863年の書簡集によると、当時の経済状態は次のとおりである。

御覧なさい、ビアリストクで繁栄し、たくましい経済活動は、その末端まで拡がつている。蒸気機関は、ロシアではまだ珍らしいものであつたが、すでにここでは、蒸気を動力とする織物工場が建設され、益々確固たるものになつている。

ビアリストク及びビエルスク地方には、いまや30以上の大工場が立ち、特の大規模の工場群はビアリストク市の中に立つていたので、事実これらの工場はビアリストクと強く結ばれている。これらの工場では、毎年500万ルーブル相当の毛織物やその他の織物を加工している。

工場労働者、商人の90%がユダヤ人である、工場が増強されるにつれて、町は益々大きくなつた。ビアリストクは評判となり、毎年人口が増加している。」

それからも町の発展は止むことなく、人口は益々増加した。1895年

62993人、うちユダヤ人は76%に当る47783人であつた。

その後、ユダヤ人口はその比率こそ下つたが、依然として常に過半数を占めた。1932年には、91207人中、ユダヤ人は50000人以上であつた。

ユダヤ人以外に、様々な人がいた。ポーランド人、ロシア人、ドイツ人リトアニア人、タタール人で、言語やそれぞれの宗教が障壁となり、いろいろの異なつた要因がからんで、彼等の間にはよそものの感覚が存在し、互いに憎み合う関係にあつた。

このようなことが、若いザメンホフの心を傷め、その後、彼をして生涯の目的とする方向へ進めさせることとなつた。

ビアリストクは、さらに不幸な時代を迎えた。1812年、大ナポレオン戦争が勃発し、町は戦場から遠かつたにもかかわらず、戦争のにおいが立ちこめた。1830年から同31年には、最初のポーランド反乱が起き町の経済に悪影響を及ぼした。さらに、1863年の第二の反乱はもつと悪い影響をあたえた。　今度は、町に直接影響したのである。即ち、戦闘のほとんどこの地方で行なわれ、多くの血みどろの戦いが町の内辺で続いた。しかし、町自体は、町の内にいる強力な守備隊のおかげで無事であつた。その後、第一次世界大戦が悲惨な状態をもたらし、第二次大戦は信じ難い残酷な結果をまねいた。

ユダヤ人には別の運命が待つていた。

1905年、兵隊たちが多数のユダヤ人を殺害し、25人が射殺された2度目の大量虐殺は、1906年6月の初めに起り、2～3日間続いた。群衆がユダヤ人を襲い、殺害し、傷つけ、そして略奪した。この時も兵隊が加わり、その結果80人のユダヤ人が殺され、さらに80人以上の負傷者を出した。

ザメンホフは、ジヤベルへの手紙のなかで、この「恐ろしいそして例のない虐殺」のことについて言及しており、さらに、ジュネーブの大会演説のなかでさらに具体的にふれている。

しかし、この2つの事件ですら色あせてみえるような事件が、35年後の1941年に発生した。ドイツ軍部隊が町を征服し、想像し難い恐ろしさをもつてユダヤ人に襲いかかつた。

悲劇の幕が切つて落された。2000人の男が一つの教会堂に集められ

閉じこめられ、そして火がつけられた。それからも、軍隊は、ほかの男や女や、ゆりかごの中の乳児に野獣のようにとびかかり、殺りくを重ねた。さらに数えきれない恐ろしい行為が続き、ついに、ビアリストクの全ユダヤ人約6万人が一掃されてしまつた。町には2人の無言の証人だけが残つた。1人は、古いユダヤ人の墓地であり、もう1人は、新しいゲットー(注)の墓地であつた。

もはや、ビアリストクにはユダヤ人がいた時の面影さえない。ユダヤ的な感じを与える環境はすべて姿を消してしまつた。

かつて、19世紀の後半にかけて、生き生きとしたユダヤ人の生活が市の中で脈打つていた。物質的にも、リトアニアのどこよりも恵まれていたしかし、民族間の関係は友好的どころか、敵のようにすらあつた。そしてまさしく、ビアリストクの暗いふん囲気こそ、ザメンホフ少年の魂をせめさいなみ、その後の彼に、共通の国際語を創り出すようにかりたてたのである。

（注）ゲットー　市当局の命令によつてユダヤ人が居住を義務づけられていた街区

7777777　777777　777777

EL KOREIO

Taegu 1973-05-04

Karaj geamikoj

Ĉi tie ni ne povas amtaŭvidi, kio okazas post unu horo--- Ĉe la starto, la fervoja striko en Hokkajdo multe maltrankviligis nin. Oni diris ke ni ne povos kontakti kun esp-istoj en Taegu, tamen ĉi tie, ĉirkaŭ ni svarmis cento da gejunuloj kun brilaj okuloj kaj ĵetis sur min pluvon da saluto kaj severaj demandoj pri Japana-Korea interrilato. Ni bedaŭras, ke ni japanaj esp-istoj faras preskaŭ nenion por tiuj fervoraj najbaruloj. La bildo(s-ro Hoŝida skribis al ni per bildkarto.--Red.) montras lageton, kie noĉululoj de Silla(新羅) ĝuis baatludon antaŭ mil jaroj. Hieraŭ ni vizitis ĝin.

Sincere via

A. Hoŝida

Ĉirkaŭ Portlanda UK

星田　淨（苫小牧）

1　エスペラント版「苫小牧の観光」

正しくは「エスペラント文付き」といえばいいか。日本語の原本は、苫小牧市、苫小牧観光連盟で出し、苫小牧～東京間フェリーの乗客に渡していたもの。写真も文もなかなかよい出来。ちょうど市で追加印刷するところと聞き、エスペラント文をとじ込んで印刷することを申入れ、訳文を作つた。印刷にまわすのが少しおくれ、出来上つたのは出発の2日前。紙ボール箱2個につめこんだ約700部は、本来なら航空料金5万円位いとられる筈のところ、団体旅行の荷物として一括したので無料となつた。同様の観光案内を出しているところは多いし、このやり方は今後もやれるのでないかと思う。薄い半透明のケント紙にエスペラント文を印刷し、製本のときとじ込んでもらうのだから、費用もそうかからない。今回は全部市の負担でやつてもらつた。市との交渉は、会員S-ro 永戸、市会議員宇佐吉雄氏（社会）のお世話になつた。

2　夏枯れの米国西海岸

太平洋上9時間の空の旅のうちに7月28日は暮れ、9時間後には同じ28日の朝日が雲平線（nuba horizonto）上にあらわれた。

やがて雲平線上にあらわれたアメリカ大陸の山が次第に近づき日航ジャンボ機はぐんぐん高度を下げながら、サンフランシスコ半島のつけ根を横切つてサンフランシスコ湾に出た。半島の山地には緑があるが、あとはどこにも白茶けた感じ。緑に乏しい感じがアメリカの第一印象。サンフランシスコから、西部のローカル線らしく荒つぽい運転のジェット機でポートランドへ。ポートランド付近も、ハイウエイの外側など立枯れたような草ばかり。日本とちがつて水の少ない大陸の景色は色彩乏しく荒々しかつた。

3　Anglisma prononco

Kongresa Universitato の中で、ブルガリアの D-ro Djoudjev のエスペラントにおける音韻学の話、各国の esp-isto; の発音の民族語の影響による devio に対する警告だつたが、それ程心配する事は

ないとの反論が多かつた。こういうところで議論するような人は、すべて発音も立派な人ばかりだつたが、米国の若い人たちでは、かなりききにくい発音の人もあつた。例のanglisma esperantoで、ヨーロッパから来た人達の発音とくらべると、ちよつとわかりづらい。この点では日本人の発音の方がkomencantoでも、esp としてはずつときれいでつた。Anglismaの特徴は母音の二重母音化で、"Kredu min sinjo—rino!" にも例がでているが、"Bounan tagon, mi trej goujas vidi von ."といつた調子。いづれにせよ、会話の経験を積んでなおしてもらう外はない。

4 開 会 式

地下のホール二つをぶち抜いた式場。定刻ちよつと前に入る。がやがやしているうち、議長、役員が壇上にそろい。やがてS—ro Holmesがmartelo でコンと卓をたたき、Mi malfermas . . . と開会宣言。東京での50ｍ U K もこうだつたなあと思い出す。式進行はいつも同様なのだろうが、各国政府、出先機関代表あいさつのあと、姉妹都市札幌市長のメッセージ代読の指名あり、板垣市長のあいさつを聞んだ。

5 Internacia Somera Universitato

例年のＩＳＵ、これは専門家が自分の専門に関して、しろうと向きに説明する講座だが、今回は次の八講座

Kompara literaturo	William Auld
Pilgrimo al Mekko	Italo Chiussi
Influo de oksalatoj	Alois Wenclewski
Esperantologio	Edmund Brent
Kreolaj lingvoj	R.E.Wood
plumbo en la aero	Ralph A. Lewin
La tradicia rolo de tempoj en Ĉinio	David K. Jordan
Enkonduko en la fonologion de Esp.	Stojan Djoudjef

最後のについてはもう書いた。外には、やはり言語関係だが、kreolaj ligvojが面白かつた。中南米のインデイオなど原住民の言語のうえに、

侵入してきた白人の言語がひろまり、kreolaj lingvoj とよばれる一種の混合語が発生した。単語にはヨーロッパ語がたくさん入つているが構造はインデイオ的なものという。日本語が構造はアルタイ系、発音は南方ポリネシヤ系に似ていることと、アイヌ語とも似た点が見られるなど、歴史の彼方にかくされている、民族や言語の形成に対する示さにとむ話だつた。ちようどカナダから参加していたF—ino Biharry Lall はカリブ海のアルバ島で育ち、このkreolaj lingvojのひとつ Papiamanta lingvo を知つていたが、D—ro Wood がそのことばをすらすら話すのに目をまるくして驚いていた。

6 学習3ヵ月のF—ino 大奮斗

関西から来たF—ino Bは、はじめ全然無口だつた。高校の先生とのこと。きいてみるとEsp. を始めて3ヵ月という。ところがなかなかやる気充分で、道を歩くときも考え考え、kuta esp—o の会話練習。2週間たつてサンフランシスコで皆そろつた時は、Postkongreso の宿舎、州立大学寮のロビーで外人esp—istoj と談笑しており、その進歩ぶりに驚いた。文法、発音など、他の自然語にくらべてはるかに簡単な基本だけ身につけば、あとは、このような、どうしても使わざるを得ない場へ出て使えば、どんどん進歩していく事がわかる。梅棹教授が「私の外国語」のなかで書いているとおり。

7 毎日太平洋上をとびかうEsp の電波

メキシコからのグループ、女性が多く、いつもにぎやかで人目をひいていた。12才というF—ino E. Baca にきいてみると、母のアマチュアラジオ交信でおぼえたという。昨年の大会でもS—ro 池本から話があつたが、これは新しいEsp の実用、同時に普及の分野を開いている。メキシコ北部Chihuahua の S—ino Baca の grupo はこの方法でEsp を学びつつ実用している。帰路寄つたハワイのS—ro Buno Cambro は、オアフ島のほぼ中央、Waniawa の自宅に stacio を持ち毎日 $\Omega 2^{30}$ （ハワイ時間）から交信している。考えてみると、ちようど太平洋全域が昼間になる頃だ。米本土から、また日本からと幾つかの局が入つてきた。Ne esp— isto の局も入つてくるが、Ni parolas en esperanto lingvo internacia を英語でもいつてne esp—

letoj に Esp による国際交信の存在を知らせていた。

8　国際都市　サンフランシスコ

Postkongreso の舞台サンフランシスコは、幕末、初めて正式渡米した　鹽丸の一行が着いて以来（金門公園あたりに碑があつた）、多くの日系人も住み、前大戦の対日平和会議が開かれるなど、日本にはゆかりの深い港町。ユニオンスクエアに近いホテルでは、ボーイがスペイン語であいさつした。我々のしやべつているのがスペイン語に聞えたらしい。ホテルでも、サンフランシスコ湾を横切る船の中でも、スペイン語を話す人をわがいて、我々が Esp で Bone, sinjoro などいうのを聞いては、おやつ？といつた顔をしてこちらを見ていた。テレビにも英語のほか、スペイン語、日本語のチャンネルあり、宮本武蔵のがん流島の場が放映されていた。新聞も英語のほか、イタリヤ語、日本語、中国語スペイン語と、いろいろ出ている。チャイナタウンの看板は、広東語が多いようだ。街頭でもこれらの言葉が入りまじつて、米国人の複雑な構成をよくあらわしていた。

9　ついうつかり〝Aj havas〟

エスペラントをやると英語や他の外国語学習と混乱しないかときかれるとそそんな事はないといつも返答したものだつたが、場合によりあることがわかつた。コトバの切替えの時の問題である。切替えるといつても日本語と英語、エスペラントのように全々構造のちがうコトバではこんがらがりようがないが、英語とエスペラントでは起り得るようだ。米国人のエスペランチストが Aj(I) havas とうつかりいうのを聞き、havasが英語の have と発音、意味とも似ているからムリもないのかなと考えた。大会の場、esp-- leto と一緒のときは Esp、だが、一人で街に出たり食堂に入つたり、買物となると英語を使わざるを得ない。そして会場に帰つた途端、一人の kongresano　Ĉu vi havas la kongre slibron？と来た。あゝとカバンをあけて思わず出たのが Jes aj havas.　思わず自分でもやつてしまつた。考えてみると、この答の3語のうち、初めの Jes は英語の Yes と全く同じだからつい誘いこまれるものらしい。相手も aj havas は聞きなれているか、変な顔もしなかつた。しかしこのような混乱は、このような場合だけで、コトバが切替わつてしまつたあとは、全く問題なかつた。

エスペラント展の

報告　高野　富輝夫（函館）

大変長らくお待たせいたしました。函館で昨年（'72）11月3日から3日間開きました展示会の報告をします。事務局編集の沢谷さんも遅い報告に大変気がもめたことと案じております。おわびします。

さて展示会は、HES（函エス会）の例会において「当地の北大水産学部大学祭でエスペラント展示会を開きたい」との提案に全員賛成していただいたことに始まる。そして、準備については、展示会場の方は、私と学友4人。書籍、ビラ、会話テープ等は、S—roj 吉田、市川、園兼、井上それに緑屋堂の S—ro Malseri Ozulo らが担当することになり、その後一週間は、準備のため大変な忙しさであつた。S—ro 市川がそのため札幌へ、連絡不通のため S—ro Malseri Ozulo が当地へ書籍を持参したり、S— ro 吉田方で本を分類したり、また会場の方は宣伝ビラ配り、アンケート作り、説明書書き等学友らと協力し合つて、準備は一気に整つた。

開会当初は、私達主催者側も大いに緊張したものでした。どんな質問が出るか？と・・　質問の中にこのようなものがあつた。

「いつたいエスペラント文法とはどんなものか？」と

そしてそれに答えた学友の答えが面白かつた。（彼はエスペランチストではないが、ドイツ語の知識があるので）

「ドイツ語では、これこれの語尾変化があり、英語も大体同じことである。その点で現在満足に世界共通語になり得るのは無いが、エスペラント語は、この文法が実に簡けつである。」と

次々と人が出入していた。

3日間私達会場係は、外が暗くなるまで、あれやこれやと問答し、アンケートをとり、書籍販売をした。入場者合計276名であつた。多入りである。しかし、残念なのは、アンケート解答者が34名であつたこと。私達の宣伝不足かと思つている。いずれにしろ、私達はやり通した。学友の中にカゼを引いたものがあつたが満足していた。彼らは、活動内容がエスペラント展示会であつたというより、エスペラント展示会を通しての準備

の面白さ、活動の充実感に引かれたようだ。もちろん「ザメンホフの生涯」は一応読んでもらつた上であるが。いずれもエスペラント学習を離れた今回の展示会でいろいろ良い体験が出来たようだ。

最後に皆様の心からのご協力に、この紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

以下は、活動についてのまとめですが、ご参考になればと思つています

準備	・模造紙宣伝ビラ　8枚 ・〃　説明ビラ10枚（エスペラントとは？、エスペラント運動の歴史、エスペラント文法、簡単な会話） ・街頭ビラ200枚配る。 ・アンケート160枚配る。 ・書籍　100冊（内、小冊子絵本22） ・手紙、写真の展示　30枚 ・カセットテープ（会場に流す。） ・会場係4人
開会中	入場者数 11月3日：28名　11月4日：131名　11月5日：117名　合計：276名 アンケート結果（解答者男17、女17、計34名 年令別 10～15：5名　16 17 18：3 1 2名　19 20 21 22 23 24 25 26：3 6 5 2 1 × 1 2名 小学生　高校生　大学生　一般 アンケート内容　結果（34名中） 1）あなたはエスペラント語を知つていましたか？　1）はい　19名　2）いいえ　15名　3）その他　なし

2) この展示会を見てエスペラント語に興味を持ちましたか？	1) はい 2) いいえ 3) その他	22名 10名 無解答 2
3) 今後エスペラント学習をしたいと思いますか？	1) はい 2) いいえ 3) その他	18名 15名 無解答 1

以後エスペラント講習会には、この人達から多くの参加者が期待できるであろう。（名前と住所は記入してあります。）

書籍その他販売	入門書、和エス辞典、エス和辞典、交通案内、その他小冊子、絵本、小説等、HBHの強力な協力もあつて29冊、1万円以上の売上げがありました。

吉小牧市文化祭「エスペラント展」

1992年10月29日～11月1日

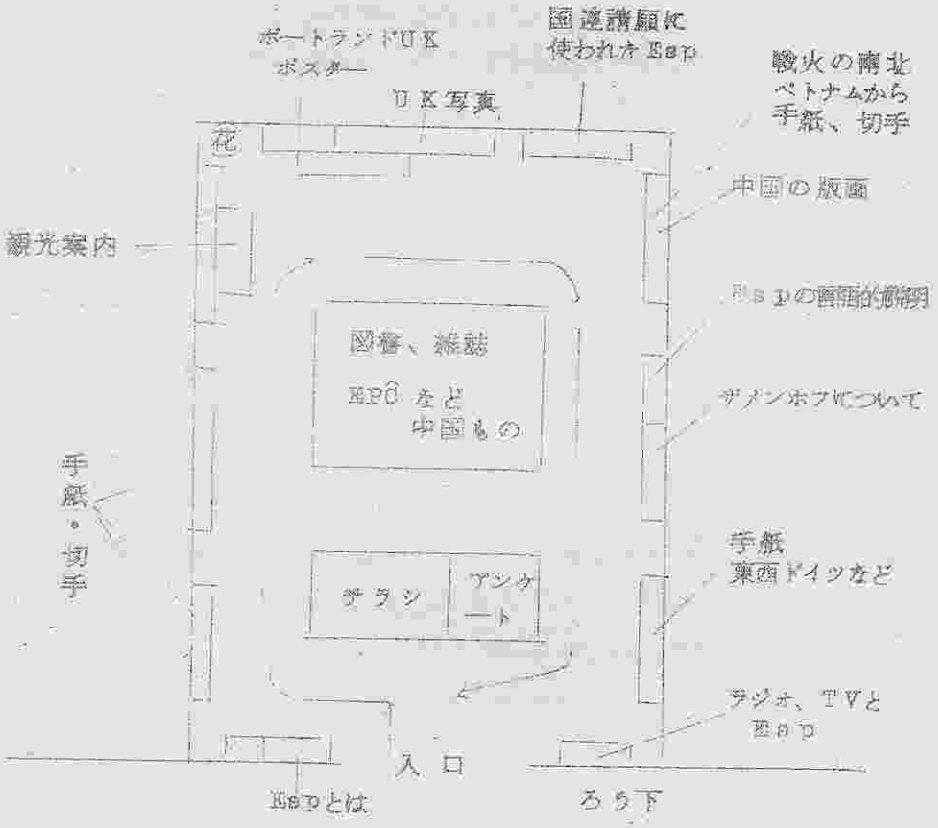
今回の展示会は、毎年行なわれる市文化祭の一環として開かれた。公民館を常時使つている文化団体として、ゐり十年の歴史をもつが、文化祭参加の回数が少ないのは我々の力不足。HBHなんて、必要を感じない、又は知らないですごす人が多いから、あらゆる機会をとらえてINFORMADOにつとめないと発展しない。ともかく、夏から準備会合に何度か出、10月29日から11月1日までの権利をとる。公民館での定例会合、ちょうどNHKが「北海道の窓」のプログラムに入れるため撮影に来たので、その時材料の準備となり都合よかつた。

10月28日の前夜準備、午後から搬入、会員F—ino」木村、越野、S—ro」綿場、永戸、小林、屋田、S—ino 星田の参加。ややおそくなつて、お好み焼で慰労会。翌1日は、のこりの仕事を有志の早出でやる。配置は図のとおり。前から準備したもの、その場で作つたものなどあつたが

何とか、今までよりはずつときれいに出来たと思う。ポートランドＵＫの写真、ポスターはなかなかよかつたようだ。

誤算　　当直者が出せないと、館では戸を開けなかつたこと。こんな事は前からよく確かめておく必要あり。昼行つてみたらしまつていたのでわかつたのだが。S—ro繃場、朝早く行つて開けるなど手間かけた。

もうひとつ　　かなりの人が来、いろいろ話したが、１１月中に予定した初等講習にさつぱり効果なし。人を「来る気に」させる点でまだ足りなかつたものは何か！　もつと考えたい。



ENTREPRENA RAPORTO de Librejo VERDA STELO

緑星堂白書 '72

Librejo VERDA STELO vendis 236 librojn esperantajn dum la pasinta jaro.

麗留世離小頭郎

営業報告ということを口実として、ついでに（といつても、もちろん余のこの駄文の本来の目的がここにあるわけだが）余の感ずるところを少し書いてみたい。 合計236冊の内訳は、

辞書類（42）、入門書、学習書（88）、初級用読み物、絵本（37）

文学書、その他一般書（43）、画集、歌集ほか（26）

辞書類のうち「和エス」が11冊、「日常用語活用辞典」（¥250）10冊、「Plena Vortaro de Esp.（PV ¥1,600）」5冊。とくに「エス和小辞典」や「新選エス和」を補なうために、基本日常用語260語についての用例をのせている「活用辞典」をよく読んでおくことを *komencantoj* の方にすすめます。これは、PVを使用する段階へのつなぎの役割をはたします。そして、できるだけPVあるいはPIVを使えるよう、そして使うようにしたいものです。RO誌の広告に「エス・エス辞典を持たない人をエスペランチストとは言わない！」とありますが、たしかにPVやPIVが *esperantistoj* の間にどれだけ普及しているかということは、私たちの運動の *kvalito* を示す *barometro* のひとつではないでしょうか。「新エス講座 *vol.II*」まで終了した人なら、十分にエス・エス辞典は使うことができるはずです。

入門書、学習書類では、「新エス講座」の *vol.I* が9冊、*vol.II* が8冊、*vol.III* が42冊。"*A Practical Cours in Esp*"（¥190）はむ川小供エスペラント会が大量注文したため、全部で31冊。この本は愉快なマンガがふんだんに使われ、短い会話文から成り立つており、*rekta metodo* のテキストとしても使えます。英文は文法解説にまとめて少しあるだけです。巻末に、エス・英の対訳単語集がついています。活字が少々小さすぎるのが難点といえば難点。学校などで生徒に教えるのには、値段も格安なので、手頃なテキストのひとつでしょう。

「会話教室」（１１）、文通案内（６）。これらは、これからもつと売れるはず。さらに、中・上級の人にぜひとも買つて勉強してもらいたいものに〝Ne tiel, sed tiel ĉi〟(1)、〝Paŝoj al Plena Posedo〟(2) があります。後者の一部抜萃は秋の合宿で中級コースのテキストのひとつとして用いられた。当代第一線に立つエスペラント詩人、[illegible]である W. Auld の手になる国際的中・上級用テキスト。新出単語には esperanto で説明が付されており、練習問題、自由作文課題がついている。「新エス講座」の vol.Ⅲまたは vol.Ⅳを終つた人にはぜひどうぞ。少なくとも esperanto で文章を書こうという人には〝必読指定文献〟！（かく言う余自身も、まだナナメ読みしただけで、ただ今ツン読中なのだが・・）

文学書その他では、話題の〝NEĜA LANDO〟が３冊。１月の下旬、札幌で催された「川端康成展」にもエスペラント版が陳列されていた。

kursgvidanto にとつて必読書〝Metodiko de Esperanto—Instruado〟(¥600)、〝Ŝiato kaj Revolucio〟、〝Elektitaj verkoj de Maŭ Zedong vol 〟各２冊、「星の王子さま」、「生命を探る」、〝Vojaĝo al Novzelando〟、〝Sen Eliro〟、〝Libro de Amo〟各１冊といつたのが主なところ。それにベトナム、ラオスの出版物が１２冊。各ロンドでエスペラント展を開くとすれば、その〝目玉商品〟となるのは、日本はもとより、これらアジアの国々で発行されているエスペラント出版物であり、小国で出されている esperantaĵo であろう。激しい北爆に抗し、自由と独立のために戦つている北ベトナム、南の解放地区、ラオスから実に多数のエスペラントの本が出つづけているという事実は、驚くべきことだ。これらの国々の samideanoj の努力に報いるためにも、私たちが１冊でもより多く買い、そして読まなくてはと思うのだが。現在、緑星堂には、〝Hon Dat〟、〝Kan Lik〟、〝La Drinkejo de l'Mutulo〟などの小説のほか、記録、レポタージュものなど１１冊ほど在庫があります。和平協定が調印されたからこそ、破壊された国土をさらに豊かな文化の国へと発展させようとする samideanoj を少しでも支援するためにも、まずは１冊でもあなたの手元に買い取つていただきたい。（あなたの友人にエスペラントをすすめるとき、何よりも有力な証拠になりうるはずだ。）

エスペラント展に関して言えば、中国で出している美しい画集"Certe triumfos la popoloj de Vjetnamio! Certe malvenkos la Usonaj agresantoj!"（¥2,000）を1枚1枚に切りはがして、きれいな台紙の上にはりつけると、立派な版画のパネルができます。苫小牧のエスペラント展で行なつていたのですが、外国から来た手紙類とともに、エスペラント展に色をそえます。出品物が少ないときには役立ちます。また盤供写真集"Renikolekto Korto"（¥1,400）などは、入門書とともに展示会場で即売すると、美術愛好家はきつと買つていくでしよう。

ともかくも1年間のあいだ、金額にするとけつこうな額になるだけ本を売つたわけだが、本の購入、販売、整理、保存といつた仕事は、思つた以上に手間のかかる割に合わない商売であるけれども、やはり現在のエスペラント界においては、欠くことのできない日常活動のひとつであることは確かだ。（それにしても郵送料の高いのにはアタマに来る！） 北海道においても、こういう仕事が組織的に解決できるとよいのだが、今のところは現状維持というところに落ち着かざるを得ない。（誰かもつと本格的に資本を出してlibro—servoをしてくれる人、あるいはgrupoがあれば喜んで由緒ある(?)屋号"Librejo VERDA STELO（緑星堂）を献上するつもり。）最後に緑星堂の"営業"に積極的に応援してくれたkamaradoj に感謝することをつけ加えて筆をおきます。

(Malseri Ozulo, Sapporo)

名地のうごき

小樽のZ祭

小樽エスペラント協会では、会員13名参加のもとで、ザメンホフ祭を開催しました。 12月17日(日)

La Espero で始まり、つづいて、D—ro 山賀から、新会員のために、ザメンホフ祭開催の意義についてお話しがあつた後、昭和46年度初等講習終了生に「緑星章」がD—ro の手から渡されました。

引き続き、今年1年間の反省と来年の計画について話合いがもたれ、最後に La Tagiĝo で散会しました。

全道ザメンホフ祭

12月10日、1970年代の日本の将来を占う指針ともいえる総選挙の日の午後2時、千才市はベルデ・ドーモにおいて、私たちの1972年最後の大型の催しが行なわれました。参加者総数29名（不在参加1名）北は名寄から南は苫小牧と、「全道」の名に値いする盛大な会になりました。更に、名古屋から s—ro 三ツ石が参加され、Zamenhofisto である氏をしては、めずらしく(?)短かい講演を。

会は終始なごやかなふん囲気の中で進められたが、ドーナッじゃない、ドナーツオの交換やら、Sapporaninoj による紙シバイなど、お祭に徹していたのが、大きな要因だつたようです。

催物が出つくしたころ、札幌が誇る名 kantanto—gitaristo s—ro 孫須と、苫小牧が誇る fama kantanto s—ro 星田とによる歌唱指導。最近の歌は、veteranoj には難しかつたようでした。

1972年の行事はこれで全部終了しましたが、この1年間に行なわれた催しは、2祭をのぞいては、北海道大会、秋の合宿と、終始雨にたたられ通しでした。これは、私たち esperantistoj の日頃の精神がよくなかつたからではないかと思うのです。みなさん！ 1973年こそは、エスペラント道に徹し、晴天に恵まれた行事を催したいものですね。

最後に、千才の f—ino 藤井、札幌の f—ino 黒川、そして千才市の藤中里先生のご努力によつて、全道ザメンホフ祭が成功裡に終了したことを特記したいと思います。 （S）

※2祭が雨にたたられなかつたのは、実行委員が ĉarmaj fraŭlinoj であつて、雨男である某氏ではなかつたからだというのが、もつぱらの定説になつている。ある意味では、これからの道内のエスペラント運動のありかたを示さする重要な真実のあらわれではないだろうか。

（Piedoj de Serpento 氏注釈）

～山中代議士再びこう主張する～

日本社会党文教部長、教育文化政策委員長、衆議院議員、岩手一区選出連続当選6回の山中吾郎代議士は、このほど「日本の進む道と教育文化改造論」と題して、B6版84ページの小冊子を出版された。

いささか旧聞に属するが、氏は、昭和41年日本社会党教育文化政策委員会に「日本における学制改革基本構想第一次草案」を発表した。その中で、満8才から満12才までの前期普通教育（少年学制）において「国際語エスペラントを必修にする」の項目が明記され、当時の国内有力新聞はもちろんのこと、広く海外のエスペラント雑誌にも紹介された。そのため一時期には、異常なまでの反響を呼び、海外の同志から激励の手紙が連日のように氏のもとに舞いこんだ。

当時私は、氏のおられる衆議院第二会館のま裏に陣している事務所に勤務していたが、寡聞にして氏と面識がなく、たまたまベルギーの交通の友から事の次第を知らされて氏を訪問したのがはじまりであつた。氏は、外国から寄せられる多数の手紙の処理に思案にくれていた矢先でもあつたので、さつそく私は手紙の日本語訳と分類整理するなどのお手伝いをした。

以後私が帰道してからも、年に一度の年賀状の交換で、かすかな交流を保つていたが、今回図らずもご丁重な書簡とともに、この小冊子の贈呈を受けた。

さつそく通読して、深く感動させられたことは、氏の政治哲学はすべて教育理念に立脚し、氏の教育改革に対する卓見はすべて今後の国際社会における日本の進むべき道を正しく予見されたうえでのことであるということである。したがつて、"エスペラントを学校教科の必修に"との変らざる信念は、氏のもつ教育理念から導き出された当然の帰結であるとの理解を深めたことである。

ちなみに、小冊子の一節を以下に紹介しよう。

☆　世界共通の教科書を採用

私は、民族の平等と独立を基調とする世界連邦の実現が、世界の恒久平和体制の到達点と考えております。そして国際会議の用語は世界共通のエ

エスペラント語を採用することこそ必要であると考えます。

したがつて、世界諸国の義務教育は、自国語の外に国際共通語としてエスペラントを第二国語として必須教科とすることを提案いたします。と

ひるがえつて、氏がエスペラントを国会舞台に引き出したのは、昭和41年、衆議院外務委員会及び文教委員会においてそれぞれ両相を召いてアジア国際大学の日本招致と学術語としてのエスペラントの採用を提唱しているのがはじまりかと思う。今、当時の議事録を読み返し、そしてこの小冊子と読みくらべてみて、氏は依然としてエスペラントに深い理解を示しておられることは頼母しい。そして、氏によつて国会にともされたエスペラントの炬火は、決して消え失せることなく、またいつのときか明るくともし出されることを信ぜずにはいられない。氏の提唱が直ちに実現に向うという安易な期待感を抱しめなければならないことは当然としても、

以上

（山 彦 英 雄）

（注） 小冊子を購読される方がおられるならば、次の方法で申込みしてください。先生は、どんなにか勇気づけられ、喜ばれることでしょう。

申込先　東京都千代田区永田町2丁目
衆議院第二会館316号室
山 中 吾 郎（宛）
（定価100円、郵送料55円）155円の切手同封でもよろしいです。

Vin Atendas!

8月11日(土)～12日(日)　第60回日本エスペラント大会

12日～15日(水)　Friska Lernejo de KLEG（研修学校）

18日(土)～19日(日)　北海道大会（研大会が終ったら，研修学校でもどつかれて，その翌日の余韻ともつてどうぞ!）
小樽市朝里川 温泉センター
問合せ先：047 小樽市花園 3-8-13，山 [illegible] 邸内
（大会についての細かいことについては次号，大会準備委員会からも出欠についても後日ご案内があります。）
大会準備委員会 tel. 22-7918

9月14日夕方～16日(日)　強化合宿（近く実行委が正式に発足して，大会までに内容についても決定する予定）

ひ・と・こ・と

K.Kimura (Sapporo)

前号で提案されていた「受信料不払運動」は、こどもの遊びである。Kial? Mi mencias pri tio iomete.

身近かな問題を取り上げると、われわれは、これまで、数回札幌市に対し、エスペラント講座を成人学校でやつてくれるように、東京都における実施資料を添付して申請したが、講座科目選考委でいつも時期尚早で没になつてしまつた。同じ論法でいけば、さつそく市民税不払運動を起さねばならぬ筈である。 Kiel vi pensas?

しかし、不払運動はちよつと棚上げしておいて、「どうして取り上げられないか」を考えてみたい。

いま、われわれが選考委になつたとします。国民から委託された限られた貴重な予算を使つて、制約された貴重な短時間内に、社会のみなさんが希望しており、喜ばれるものは何か、地域社会の向上のために役立つものは何かを探すことになるのですが、現在のエスペラント運動は余りにも小さく、選考材料集収の網に引つかかつて来ないのが実状でしよう。引つかかつて来たとしても、エス語の必要性を認めていない選考委の選考の対象になるか、ならぬかは明白でしよう。もし、選考委の中にエスペランチストがいたとしても、選考の対象にするところまで説得できるかどうかもむずかしいでしよう。客観状勢の優劣に影響されることが多いのです。

現在、日本において、エスペランチストは、こどもを除いて、多目にみても1000人に1人位いでしよう。このうち半数は居眠りしているのではないですか。2000人に1人が活発に動いても、社会の小波にもなつていないでしよう。こうした現状を正しく認識できたならば、エス語講座を取り上げない相手を非難攻撃するどころか、その energion 足許を固めるために使うべきであることに気付くでしよう。自らの努力のたらなかつたことを知れば、相手に対し無用の攻撃はできないでしよう。現在1000人に1人しかいない Esp—isto を100人に1人まで普及できれば、その動きは中波位いを感じさせ得るのではないでしようか。これまでエス語が普及しなかつたのは、われわれの努力が不足していただけではないと思

うのです。何事にも天の時、地の利が必要です。いまや、われわれの運動にも天の時が巡つて来たようです。これまでにまいた種も芽生えてくるでしょう。希望をさらに大きくふくらませて、宣伝と学習を平行して行ない同志の獲得に努めたいものです。スイスで左側通行を右側通行に切換えるのに10年かかりました。左を右に切換えるだけの簡単なことにも10年かかるのです。言語の問題ne tiel facila.

（注）NHKにおいては過去に（昭3～5年）3回エス語講座をやつている。当時エスペラントを知らざる者は文化人に非ず、という風潮が流されていたようで、札幌の会員が250名位い記入されていたのを記憶している。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

Esperanto kaj mi

藤井　千枝子（千歳）

私がこの語を耳にしたのは、中学生の頃だつたと思います。その時はただそういう語があるということを知つただけで、それ以上は興味もわきませんでした。そして短大時代に入り、私は小樽にいたのですが、新聞でエスペラント講習会があるのを知りました。以前聞いた語が身近かにわかる機会を得たということ。特に人の知らないものを知るという優越感みたいなものを感じ、次の日から週に1度通うようになりました。この小樽の頃は学校が休みで千歳へ帰つてきている時はもちろん休講しました。ですから半年位いだつたでしょうか。それから卒業して千歳へもどつてきて、ある期間を置きましたが、1度始めたことは最後までするという性分から千歳エス会に入り現在まで勉強しています。エスペラントを始め、私は外国へ行つた時エスペランチストを頼りに行けるということを知りました。それが特にエスペラントを持続している理由かもしれません。

今日、エスペラントをよく知つている者は何人いるでしょうか。私が始めた動機つまり優越感みたいなものは、エスペラントをやり始めて以来薄れてきています。現在ではエスペラントは必要ないからです。私は、英語

も好きで勉強してきましたが卒業してからも少しづつながらしています。職場は、ほとんど英語は使いませんが、前に外国の人が来て苦労したことがありやはり英語は離れるのが恐しい位いです。いつ英語を使うかもしれないという中にいるからです。しかし、エスペラントはそういうことがありません。よく商社等で学校を出てから長くたつている人達が英語を猛勉強している場面を見ますが、やはり必要だからです。もつともつと外国のエスペランチスト達が来てエスペラント語を話せば良いと思います。しかし一番普及する道はなんといつても中学や高校で授業に取り入れることです。皆がエスペラントを知る機会があれば良いのです。そのためにも、私達はもつともつと活動を広めなければいけないと思います。

短大時代に友達とエスペラント語について話したことがあります。その友達は、「エスペラント語を母国語としている国がないからいつかは消滅するのではないか。」と言うのです。私は消滅はしないが、エスペラント語がより広まることは残念ながらないと思います。とは言つても必要、不必要にかかわらず、又どんな動機であれ、エスペランチストが少しでも増えることを願つています。

☆ ～ ☆ ～ ☆ ～ ☆ ～ ☆

Atenton, karaj gesinjoroj!

講演会のお知らせ

エスペラント世界大会に参加して

parolanto : D-ro 篠田秀男（山形市）

UEA日本代表、日本医学Esp会長

Viena UK（1971年）およびPortlanda UK（1972年）のスライドも映写

世界大会への出席を考えている方（とくに今年のペオグラード大会に行かれる方はぜひ！）は、この機会にいろいろ聞いておいて下さい。

とき : 6月23日（土） pm 6:00～9:00

ところ : 札幌市南大通西5、山之内製薬ビル4階会議室
（となりのkafejo「幻想」より入口）

かいひ : （コーヒー代 150円位）

El nia leterkesto

向井 豊 昭（日高）

人知れぬ山の中でひっそりと・・・・

この前、フランスの小学校から児童画が沢山送られてきました。

このごろは官費による教員の海外視察がはやり、児童画などを持ち帰つたニュースが、この日高管内の新聞などにものつています。わたしのような不良教員は、まちがつても海外視察などさせてもらえませんし、エスペラントによつての作品交流も、人知れぬ山の中でひつそりとやられているわけですが、これすべて私費であることに、わたしは満足しています。

別にとりたてて言う程どのこともない、このような曖昧的な状態に今は満足しているだけ。これがエスペラントの運動だとは毛頭思つていません

（1973年1月3日）

向井さんは、フランスの学校から録音テープの交換を申込みも受けました。後日送られて来た第2信です。（Red.）

ちようど録音も終えましたので、早速フランスへ郵送しようと思います録音テープには「どんぐりころころ」「原爆を許すまじ」を日本語で（後者はエス語でも）歌つたり、器楽演奏をしたり、エスペラントカルタを日本語訳で読んだりして、エス語での若干の挨拶やら解説やらを吹き込みました。エスペラントの発音を耳できいたのは星田さんと一度会つたとき、後は教材のレコードなので多少心臓のいる作業でしたが、はたして相手はどうとるでしよう。

この前"Nova Vojo"の誌上で、コペルニクス生誕500年記念の国際児童画展の作品募集の公告があつたので、3枚ほど明日送ろうと思つています。かぐや姫、月のうさぎなど、空に関わる絵を日本的なところで子どもに描かせてみたのです。

遅々として身につかぬ語学力ですが、これからも自分の力にあつた程度にエスペラントを活用しながら、少しずつその「本質的なもの」に近づきたいと思つています。（'73年1月29日）

その後……

この前、指導主事なるものがわたしの学校に来て、小生のささやかな活動を知り、新聞記者に教えたとかで、道新の支局から人が来、2月25日の日高版に、フランスの小学校との交流が報道されました。切りぬきは、フランスに送つてしまつたので手もとにはありません。半日がかりでIeteroを書くような有様なので、あんまりはずかしく、PRはごめんだつたのですが、むこうも飯のタネにしなければ・・・と推測し、記事にさせました。まあ、日高版ていどなので、それほどのはじをかくことでもなかつたです。

これといつた反響はなし。（3月3日）　向井豊昭

種苗連盟会員のうち最長寿者である米山さんからのたよりです。秋の合宿に欠席参加されたが、たいへん元気のよい、ユーモアのある話をしてくれた方です。農繁の間だけホロカヤントーで小さな会議を開いています。（Red.）

米山貫吉（大樹）

なん枚かの年賀状の中に北海道エスペラント連盟からのエス語の年賀状らしい1枚が入つていた。読むだけは一応読めたが、意味はさつぱりわからない。わかるのは十分の一もない。試験問題でも渡されたような重荷を感じて、後でゆつくり読もうと気にしながら3、4日すぎて、いざ読返えすと一語一語辞書をひかないとわからない。それはいいとして三ツ四ツひいて、さて一句切りとなると、もう前の語を忘れている。はじめからメモすればいいのだが、一いち書くのは面倒だしそれには及ぶまいと高をくくつて読み進んで行くと、まるで穴のあいた網で魚をすくうようなもので、片つぱしからつるつる抜けてしまつててんで頭に残らない。仕方なく一語一語訳語をつけて、つぎ合わせるとはゝあそういう訳かとどうやらわかつたような気がする。心細い話だが、まあ一安心といつた訳で、文面は今年も一層エスペラント運動を積極的にやろう。そしてそれ等のことを書いた日本語の原稿でもいいから20日までに書記の沢谷さんまで送つてくれということらしいので、申訳にこの一文をものにした次第です。もし間違つていたら大笑いですね。読書百ペン意自ら通ずつて先輩ラジオでいつていたから、そのつもりでやります。さようなら　（1973年1月5日）

エスペラント教員免許状について

今日までの教員免許状の制度とエスペラントとの関係については『エスペラン』誌1952年9月号にくわしく述べられていますし、獲得の方法については同10月号に私が書いたものがのつていますので、当時の状況は十分わかると思います。ただし、その後少し文部省と教育委員会の態度が変つています。

その一つは、エスペラント免許状は出さないときめたらしいこと。

その二は、個人に助教諭免許状は書き替えをしていたのを認めなくなつたことです。

私の手に入れたエスペラントの助教諭免許状（元来この免許状は普通免許状とちがつて3年間の期限付きです）は期限切れとともに2回目の書替えで期限切れになり失効しています。したがつて、今後私と同じような方法で手に入れることは不可能だと思います。したがつて私の場合は現在では特例となつてしまい、今の若い方には役立たないこととなつてしまいました。前記1952年10月号にも書きましたが、大学の正規の課程で教員免許状取得に必要な講座を持つて教員を養成することしかないと思います。

今後はその方面に働きかけることと啓蒙をすることではないでしようか。私の考えは以上の通りですが、何かポイントをおさえての御希望がありましたらお知らせ下さい。

私、昨年4月定年退職して高校教育から離れています。

細井末夫（山越郡八雲町末広町143）

「北海道新聞」4月30日付朝刊の全道版に

日韓親善にひと役

あすエスペラント交流会に出発

という（見出し）蒜山牧の藤原さんの紹介が、写真入りで出た。

おかげで札幌エス会の初級講習会の案内が同紙に、たいへん好意的に取り上げられた。タイムリーな記事が幸して、初級講習会に初日23名が集まった。講習会についての報告は次号に！

S-ino Akiko Woessink-Nagata からのたより　ルーマニアにて　1973-2-26

第1信

HEL、SESのみなさま

きょうは日本語でかきましょう。というのは、このくにではいまだに検えつが行われ、思想表現の自由はなく、手紙は開封されるし、本などのぼつしゅうはしょっちゅうです。

2月17日から2週間ここで雪山の中でのんびり暮すのが休暇旅行の主な目的ですが、国際語のせいで、ブラショフ市の一家庭をおとずれ、コバスナ町の一家庭に行つたときは3人のルーマニアのエスペランチストがあつまつてくれました。この国では外人との会合は証人（立会人）なしでは許されないそうで、一度私たちのために催してくれそうだつた歓迎会もたち消えとなりました。あらゆるところに軍人を見かけますし、人々はあまり経済的、社会的に幸福そうではありません。ルーマニア人は2年に1度外国を訪れる権利があるそうですが、家族と家と財産をのこしてでないと外国行きは事実上許されず、それらがあつてもエスペランチストなど自由思想の持主とおもわれそうな人は外国行きを許可されないそうです。私たちがどこの国へでも行きたいときに行けるのをとてもうらやましがつています。旅行者にはたくさんの教会などをこの国ではみせますが、ルーマニア人で教会に行けるのは停年退職した老人だけで、若い人がいくとすぐ職場を首にするそうです。そんなことは国際語を知らない一般旅行者には知らずじまい。またもや国際語の利得を味わつています。なかなか世界はおもしろいなとまた感じ入つています。

ヴースインク永田明子

第2信

1973 03 21

Danke mi hodiaŭ ricevis n-ron 49 de "Esperanto". Mi ĝojas kun vi, ke ĝi pli ofte aperas ol antaŭe.
Ĉu vi ricevis poŝtkarton ekspeditan en Rumanujo? Mi adresis ĝin al HEL/SES ĉe f-in Mine. Ĝi ne estas grava poŝtkarto, sed mi scivolemas, ĉu ĝi atingis vin; mi skribis klaĉe pri la reĝimo kaj ne libere farebla E-movado en Rumanujo — en la japana lingvo, por ke oni ne konfiskuu

tiun karton.

Mi intencas baldaŭ eksiĝi de la Centra Oficejo pro la troa laciĝo de la laboro. Post la eksiĝo mi povos havi tempon por verki artikoletojn por "Leontodo" aŭ "La Revuo Orienta".

Salutojn al vi kaj al niaj komunaj geamikoj!

Akiko Vusink—Nagata
(Woessink=ŭusink/vusink)

第3信 &&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&

1973 05 14

Per aparta aera poŝto mi sendis la majan"Esperanto"-n, kiu estas la lasta/fina numero redaktita de mi. Ekde majo mi ne plu laboras en Rotterdamo. Pro la troa laco mi rezignis de la ofico kaj nun hejme zorgas resanigi min. La 4-hora ĉiutaga veturado per vagonaroj por 3-hora oficejlaboro estis vere laciga, kion mi eltenis dum 1 jaro.

Salutojn al vi kaj al la aliaj geamikoj komunaj al ni. Mi konsilas al vi, ke vi ankau estontece sendu "Leontodo" al labiblioteko de UEA.

Hodiau nur mallonge nur por informi SES-anojn pri mia eksiĝo, Se vi hazarde renkontos HEL-anojn, ankau al ili miajn salutojn bonvolu transdoni.

Ĉi-jare mi iros al Beogrado por la UK.

Akiko Uusink-Nagata
(Woessink)

3333333333333333333333333333333333333333333333333333

La 21an de apr., okazis la 47a Kjuŝua Kongreso en Hukuoka, kaj HEL sendis al la kjuŝuaj gesamideanoj niajn salutojn el la plej norda lando per telegramo.

Kanda, 1973-04-25

Koran dankon al vi pro la saluta telegrama al nia 47a Kongreso en Hukuoka. Bonorde finiĝis la kongreso, kiun aliĝis 57 esperantistoj.

Prosperon al via Ligo!

Tute via
Unoki
(sekretario de KEL)

nagoya, en la 15a de marto, '73

estimata redaktoro de Leontodo,

(s-ro, vi volu havi grandan animon, ne plendante kontraŭ mia nova emo, kiu karakterizas per la neuzado de majuskloj en la frazoj.)

mi amente, la tutan parton de la organo deHEL, ĝoje legis, kiun f-ino Huzii en Titose sendis al mi.
mi tuj skribis al la instruisto en la montara regiono Hidaka en longa letero. Kun la vortoj "kun emocio mi legis vian..." la samideano instruisto min respondis en bona Esperanto. nun estiĝas inter li kaj mi korespondado kun "samideaneco" en la vera senco de l' vorto.

sur la paĝo de la organo en miaj vortoj mi trovis eraran klarigon pri la kongreso, en kiu nia majstro prelegis pri la eduka kaj instrua signifo de la kongresoj de esperantistoj.
en la kunsido ĉe Nakajama-transpasejo mi ne parolis pri la eduka signifo de nia lingvo Esperanto, sed pri eduka signifo de la kongresoj, mi akcentis, citante la vortojn de nia majstro.
se oni deziras legi rekte la tekston de la parolado, oni foliumu jenajn du verkojn;
(a) Paŝoj al plena pasedo (p.158)
(b) Retoriko de Ivo Lapenna (aldono: p. 257)

la oficiala titolo de la kongreso ne estas "la unua internacia kongreso de esperantistoj", sed "La Prepara Konferenco de Ruslandaj Esperantistoj" en St. Petersburg en la jaro 1910.
s-ro redaktoro, vi nepre ripete legu la tekston kaj volu rekoni la instruan kaj edukan signifon de Esperanto-kongreso, mi konsilas.

iom pri mia viv-signo.
en marto kaj februaro mi grimpis sur la neĝan monton en la montaro Suzuka. februare kun du junaj samideanoj, kiuj por la unua fojo spertis bivakon sur neĝo en frosta vintro, mi iris al monto kun "ice pickel" kaj "zelt"--tendeto mia amata--. marte mi sola iris al alia neĝa monto. estas bedaŭrinda, ke en la montirado mi sentis min maljuniĝinta. lastatempe mi pigre kutimas pasigi tagojn, nur diboĉas en legado de esp-aĵoj kaj skribas al amikoj.
hieraŭ mi tralegis legindan libron "Interlingvistiko kaj

Esperantologio" de d-ro W.Manders (1950). mi, diletanto en la studo de nia zamenhofa lingvo, multon lernis el tiu tralego, tamen vi neniel imagu al vi, ke min nun kaptas la studo de Esperantologio. Ne, ne... nun min kaptas la ideo kaj koncepto---hassoo--- de ekologio, antropologio kaj biologio. interesas min verkoj pri tiuj kampoj. hieraŭ vespere mi aŭskultis prelegon de prof. Imanisi kinzi, "kio estas la homo?"
Ĉiuokaze vi volu rekoni, ke vi skribis al f-ino Huzii pri la sendo de Leontodo al mi kaj tio igis min skribi al vi.

via mituisi kiyosi

p.s. kiel vi opinias pri la opinio de d-ro W. Manders? Mi miris, ke la Esperantologo havas tian demokratian, utilisman kaj pragmatisman opinion pri lingva korekteco en Esperanto. Mi povas lin subteni, kvankam pri tiu problemo mi mem estas severa kaj eĉ rigora homo. Ĉiuokaze mi kaj vi devas plu lerni nian lingvon.

****

el "Interlingvistiko kaj Esperantologio"
de d-ro W. Manders (1950/ Muusses)

Ĉapitro V La Evoluo de Esperanto
--pri lingva korekteco--(62/63p.)

la demokratia principo kaj la logiko havigas n normojn, sed la Fundamento ne sufiĉas, kaj mankas aŭtorilata instanco, kiu povus devige decidi kie ni sekvu la zamenhofan ekzemplon kaj kie la logikon aŭ la tradicion.
Ni povas bedaŭri ke ne ekzistas absolutaj normoj por difini la korektecon. Tamen ni ne troigu ĝian valoron, Ĉiam ni konsciu ke Esperanto estas helpa lingvo. Ĝia sola tasko estas peradi inter homoj diversnaciaj. Se ni uzas la lingvon tiel ke la celo efektiviĝas, ni povas esti kontentaj. Kiu per Esperanto sukcesas facile komprenigi sin al alilingvanoj, tiu plene atingis la celon por kiu Zamenhof kreis la lingvon kaj por kiu ni ĉiuj lernis ĝin. Eble li ne esprimis sin laufundamente, eble lia lingvo estas kontraŭlogika kaj nek zamen-

hofa nek tradicia, sed ĝi funkcias, kaj ĝi funkcias celkonforme.

Ĉu do la penado al korekteco estas superflua? Neniel, Precipe kiam oni sin direktas al diversnacia publiko, ekz, verkante libroj kaj artikolojn aŭ paralante antaŭ la radio, estas dezirinde esprimi sin korekte, ne nur ĉar eraroj kutime ŝokas kaj malagrabligas al multaj la legadon kaj auskultadon, sed ankaŭ ĉar esprimante sin laŭ la konvencia normoj oni ordinare atingas maksimuman kompreneblecon, Sed estus pedante postuli ke ĉiu infano, ĉiu laboristo kaj ĉiu intelektulo en sia esperantlingva konversacio aŭ korespondo laueble evitu ĉiujn erarojn kaj esprimadu sin en lingvo neriproĉebla.

# # # # # # # # # # # # # #

nagoya, 1973-03-16

estimata inĝeniero, kara samideano

laŭ la informo de radio antaŭhieraŭ en via regiono neĝis, sed hieraŭ estis hele, sed malvarme ankoraŭ, oni anoncis, ke ĉe petrolbutiko la specoj de petrolo komencis manki pro la obstrukco de transportado laŭ la fervojista batalo kontraŭ ŝtatfervoja autoritato. s-ro, ĉi tie mi neniom intencas kalmunii la batalon de la fervojistoj, socia realo...

ĉi-somere oni invitos min al la kunlernado sub la nomo "Friska lernejo en arbaro"--au "sub arboj"--. la kunloĝado estos tuj post la kongreso en kameoka, Jam al mi venis invito, kiel unu el instruantoj mi devos loĝi en la vico de gejunuloj, tamen....mi deziras resti en via pli friska lando en somero....

lastatempe mi tralegis "Interkingvistiko kaj Esperantologio" de d-ro W. Manders (1950), Leginda verko laŭ mia vido. la kopion de la parto de la majstra verko mi sendas al vi. volu legi kaj, se eblos, sendi al mi vian opinion pri tiu temo.

antaŭ somero mi nepre vin vizitos kaj en tiu okazo mi deziras viziti ankaŭ al Horokayantoo kaj Hidaka-mituiwa.

same kiel vi ankau s-ro miyameto admonis min, ke mi verku iomekz., pri mi mem, mia vivo ekster esp-ujo...

Tiurilate, mi estas vere maldiligenta, pigra sabotemulo, ĉu ne? mi petas al vi, vi volu, de tempo al tempo, riproĉi min.

amike, via

mituisi kiyosi

inter mi

☆ S—ro アリマ ヨシハル（札幌）は、昨年末、埼玉県に転出

新住所　358 埼玉県入間市下藤沢832～3

☆ 道教育大の三沢先生は、8月のベオグラード大会に出席予定とのこと東欧諸国を中心に、エスペラントの威力を十分発揮して〝観光コース外〟のルートで、じつくり見聞を深めてくるそうな。レポートを期待！

また、S—ro 笹村（札幌）、長岡（む川）も世界大会参加を考えているとか。

☆ 1月13日、札幌エス会の例会にひょつこり、大阪はRondo Esperaの S—ro栗原博が。北海道へスキーに来たとか。氏の話によると、オランダに帰つたS—ro Wijmer はUEAで働らいているとのこと！

☆ 北海道新聞 72年12月24日付朝刊、「主役・わき役欄」に「ベトナムの友へ」と題して星田さんが紹介された。ニクソンのクリスマス北爆が強化されていたころ。6月30日同紙に載つた「現地医学生からのたより」に続くベトナムとエスペラントの第2弾。今回は全道版。

☆ S—ro 小林正明は、今春札幌大学を卒業、4月から河東郡上士幌町の上士幌高校の教師として赴任

☆ S—ro 向井豊昭は三石小学校へ

新住所　059～32　三石町字鳥舞

☆ S—ro 仁熊義則は、北大工学部大学院修士課程を卒業（SESの71年春の初級講習会受講生）。東京都立高校の物理教員として教だんに立つ予定。（東京のみなさんよろしく。）

新住所　東京都江戸川区平井2～24～3　滝沢秀夫方

☆ 東京にいるS—ro 関尾徳司もベオグラード大会に参加するとのこと

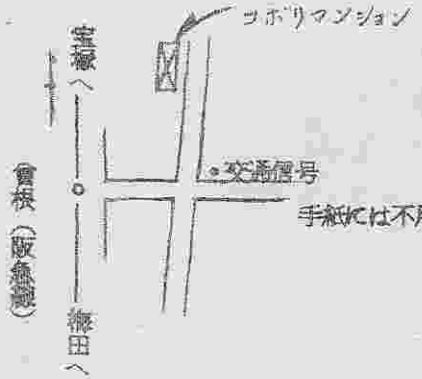
☆ 恒例の携帯の全国合宿には札幌から5名参加。同じくora semajnoの間、日韓RENKONTIGO（5月2日～7日、釜山～大邱、麗州～ソウル）には苫小牧から2名参加（　　）。いずれも参加報告は次号

☆ 札幌では5月12日から隔週土曜日、中央ナイピスト学院で初級講習会。期間は3カ月間。苫小牧でも5月から。

☆ 小樽では5月10日から12月13日まで初級講習会。

ＫＬＥＧが新事務所に移転

お聞きおよびのことと存じますが、ＫＬＥＧ事務所が移転しました。都市計画道路による立退問題がおきてから、全国のみなさんのご支持のおかげで、マンションの中の１戸がかえたわけです。今年は組織の中心メンバーも若返つて、その活動に新風が吹き込むであろうとキタイしています。（高槻エス会　田中貞美）



新住所

561

豊中市曽根東町１～11～46～204

手紙には不用（コポリマンション豊中２階）

電話（068）41～1928

関西エスペラント連盟

なお、当分の間の電話連絡は午前１０時～１１時半、午後１時半～４時半。おいでのときは、前もつて連絡いただけると、ありがたく存じます。これ以外の時間にも、もちろん不在しているわけではありませんがときには・・・・・・　とのこと。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

横浜エスペラント会事務所開設

私たち、ハマロンドもようやく自分たちの事務所を持つことができました。交通至便の場所です。２部屋ありますので、来浜の節は宿屋がわりにぜひご利用下さい。

交通；横浜駅東口から桜木町方面行きのバスで一つ目の停留所「高島町」下車が一番便利です。バス停のすぐ前です。

住所；220　横浜市西区桜木町７～48　TEL；（045）323～1424

常勤者が居りませんので、急ぎの電話は今までどおり（045）331～6557（ドイ）あてお願いします。

Elementa Lernejo en Organo

Ia 6an de jan., 1973

HAMADA — Kunisada

Leciono II Japana Lingvo

Ni esperantistoj amas internacian lingvon, mi opinias ke ni devas ami japanan lingvon pli ol esperanto. Do, mi provas skribi utilajn librojn laŭ mia eta sperto.

Pro lernantoj, mi rekomendas jenajn:

☆明星学園国語部編「にっぽんご」1～7　麦書房　各　200円

☆石黒修「知っておく必要のあることばの秘密」　牧書店　500円

☆白石大二編「当用漢字・送りがな・歴順例解辞典」

帝国地方行政学会　650円

Por vi mem jenajn:

☆西尾、岩淵、水谷編「岩波国語辞典第二版」　岩波書店　750円

☆新村出編「広辞苑」　岩波書店　3200円

☆貝塚、藤野、小野編「角川漢和中辞典」　角川書店　1500円

☆諸橋轍次「大漢和辞典」　大修館　65000円（全13巻）

☆飯田蛇笏等編「俳句歳時記」　平凡社　5冊　各　750円

☆奥作、西沢著「執筆・編集・校正」　岩崎美術社　1200円

☆横井忠夫「誤訳悪訳の病理・ミスを防ぐためのイからヰまで」

現代ジャーナリズム出版会　820円

☆佃実夫「文献探索学入門」　思想の科学社　900円

☆大久保忠利「話しのしかた」　春秋社　500円

Ni devas ekzameni nian lingvon, por antaŭenmarŝi, ĉar reganto ĉiam uzas lingvan magion por nin regi. Por vidi eseneon ni devas akrigi nian senson. 1894—5, Ĉino—Japanan Militon okazigis japana registaro por "Paco en Orienta", 1904—5, Rusa—Japanan Militon okazigis por "Orienta Paco", La Unuan Mondmiliton (1914—5) por "Paco de Ekstrem—Orienta", Pacifikan Militon (1941—45) por "Paco en Mondo" kaj "Eterna Paco de Orienta Azio" ... de tio mi konkludas, ke ĝis nun militoj nenial ekzistas krom "Paco".

Japana--Usona Sekurdefenda Traktato(Traktato pri Reciproka Kunlaboro kaj Sekureco inter Japanio kaj la Unuigintaj Statoj de Ameriko)devas esti inter Japana--Usona danĝerdefenda Traktato.

(Daurigota)

88888888888888888888

Esperanto-Movado en Suda Koreio

88888888888888888888888888

TOKIO, 28. III. 1973

Estimata samideano,

Mi multe dankas al vi pro via sendo de la organo "LEONTODO" kaj la aperigo de mia anonceto en ĝi. Ĝis nun jam venis ĉ. 10 petoj el Hokkajdo inkluzive senditan de vi. Povas esti ke vi jam ricevis leteron el Koreio, ĉu ne?

Pri Koreio informinde al vi estas, ke s-ro So nove fondis organizaĵon "KorEJO(Korea Esperantista Junulara Organizo)", apartiĝinte de KEJ, kiu estas junulara sekcio de KES, por tutlandan junularan movadon kunligi. En Koreio ekzistas du centroj de la movado--nome KES en Seŭlo kaj KEI en Taegu, kaj aparte agadas. Sed jam nun por disvastigi la movadon necesas la kunlabero inter tiuj du grandaj urboj---almenaŭ junularo kunlaboru. Sed tiun pensoon ne akceptis la prezidento de KEJ, s-ro prof-ro Gim Taekeng (Semanto). Do, s-ro So devis fondi alian. KorEJO havas sian membron ne nur en Seŭlo, sed ankaŭ en Taegu. Ni atente rigardu la iradon de la movado en Koreio, la najbara lando.

Kun koraj salutoj al ĉiuj hokkajdanoj,

via

KRIZANTEMO

緊急戦政難救助連絡 SOS…… SOS…… 北海道連盟 事務局

連盟会員のみなさんへのお願い!

至急 1972年・1973年分の会費(個人会員800円).

Rondoに入っている人は その分の会費を払い込んでください!

50号を発行して,残っている連盟の戦政は完全に底をつきました。

次号(7月末発行)の資金がありません!! HELp! HELp!

DIO STRIGO PRIKANTIS SIN "KONKUĜA"

Jukaro tradiciita en Horobecu

Prove tradukis A. HOŜIDA

0 Konkuĝa
Ve, kadukas voĉo mia, kiu iam sonis bele,
Kvazaŭ kantis la pafarko ĉe la mezo de tenilo,
de ĉeriza ŝel' volvita.
"Tamen mi ja komisius, por negoci en Ĉielo,
5 por la temoj kvin kaj duon, se iu havus fidon je si,
pro kapablo elokventi." Mi parolis frapetante
la kovrilon de ŝintoko kun ringegoj el bambuo.
Tiam voĉis de ekstere, "Kiu krom mi povas esti
elkventa kaj memfida
10 ĉe la tablo de negoco?"
Kaj aperis korvo juna.
Lasis mi lin en la domon
kaj ekdiktis frapetante
la kovrilon de ŝintoko.
15 kun ringegoj el bambuo,
lin por sendi al Ĉielo.
Post nur tagojn tri, mi trovis
post la forno lin dormanta,
nur tri temojn finaŭdinte.
20 Pro kolero ekardante
mi mortigis la junulon
la flugilojn batadante.
Mi daŭrigis frapetante
la kovrilon de ŝintoko kun ringegoj el bambuo,
25 "Komisius mi volonte, por negoci en Ĉielo,
por la temoj kvin kaj duon, se iu havus fidon je si,
pro kapablo elokventi!"
Tiam voĉis ĉe la pordo,
"Kiu krom mi estus ulo, elokventa ja sufiĉe

30 por negoci en Ĉielo?"
kaj envenis montgarolo.
Mi enlasis lin la domon
kaj komencis dikti kvin kaj
duon da negocojn, frapetante
35 la kovrilon de ŝintoko kun ringegoj el bambuo.
Kiam mi diktadis al li, temon kveran post
kvar tagoj,
trovis mi lin dormetanta
post la kadr' de forn' sidanta.
Pro indigno mi mortigis
lin per batoj al ĉiuj plumoj.
40 Vokis mi ankoraŭfoje, frapetante kaj taktante
la kovrilon de ŝintoko kun ringegoj el bambuo.
"Komisius mi volonte, por negoci en Ĉielo
por la temoj kvin kaj duon, se iu havus
fidon je si
pro kapablo elokventi."
45 Jen cinculo juna, modesta
venis kaj sidiĝis bele,
kvazaŭ dio sur sidejon
de maldekstra flanko mia.
Do mi diktis frapetante
50 la kovrilon de ŝintoko kun ringegoj el bambuo,
al li temojn kvin kaj duon,
tage, nokte, kaj ankoraŭ---.
La cinculo sen laciĝo, ho aŭskultis la
diktadon
kaj eliris tra l' fenestro tuj ĉe l' fino
de l' diktado,
55 post la paso de ses tagoj,
por negoci en Ĉielo.
Jen la skizo de l' plendo:
En la homa lando, tere
oni suferis pro malsato,
60 homoj ĵus mortontis vere.
Ĉar la dio cervonava
kaj la dio fiŝonava
konsiliĝis kaj decidis,
ke neniom ili eldonu
65 siajn cervojn, siajn fiŝojn,
kvankam aliaj dioj petis,
ili ignoris kaj ne donis.

Do la homoj en ĉasado
kaptis neniun cervon monte,
70 trovis nek fiŝon en rivero.
Sentis koleron mi pro tio,
sendis cinculon por negoci,
pete al dioj de cervoj kaj fiŝoj,
ke ili eldonu donacojn al homoj.
Kelkajn tagojn poste mi aŭdis
flugilbaton el Ĉielo.
75 Iu envenis. Ho, cinculo,
nun pli belas ol anteŭe
kun kuraĝa digno kaj ŝajno.
Li komencis al mi raporti
kion li vidis, aŭdis ĉiele;
80 Dioj cerva kaj la fiŝa, kiuj estas en Ĉielo
ne eldonis la donacojn ĝis hodiaŭ,
ĉar per stango batas la homoj
ĉe la kapo, por kapti cervon.
Senfeliginte, ili lasas cervokapon sur arbejo.
85 Fiŝon por kapti, la homoj batas fiŝon ĉe l' kapo
per bastono putraligna.
do la cervoj nude, plore,
venas re al cerva dio,
kaj la fiŝoj kun la putraj lignopecoj
90 ĝeme revenas al fiŝa dio.
Tiel koleris la ambaŭ dioj, kune decidis
doni neniom da la ĉasaĵoj.
Tamen, se la homoj de nun
ĵuras dece trakti ilin,
95 donos cervojn cerva dio,
donos fiŝojn fiŝa dio.--
Tiel raportis li detale.
Mi donacis dankajn vortojn
por laboro de l' cinculo.
100 Mi atentis kaj konstatis,
ke la homoj tre maldece
traktas la cervojn kaj fiŝojn,
kiel diris li raporte.
Do instruis mi la homojn
105 per la sonĝo dum dormado,
tiel ke neniam ili

peku kontraŭ di-favoro.
Konsciinte sian pekon,
ili ekuzis batbastonojn
110 belajn kun ornamaĵ' por kapti fiŝojn.
Kiam ili kaptis cervon,
ili ornamis ĝian kapon.
Do la fiŝoj, ĝoje kun belaj lignornamoj
al fiŝhava dio revenas.
115 Cervoj ĝoje belrazite
al cervhava dio revenas.
La du dioj ĝojis tion,
kaj eldonis pli da fiŝoj,
pli da cervoj, Do la homoj
120 jam ne havas malsategon,
nek suferon, malfacilon.
Nun mi povas trankviliĝi.
Mi restadis ĝis nun, kvankam
jam maljuna kaj kaduka
125 estas mi kaj volas iri
al Ĉielo; ĉar malsato
regis landon, kiun mi gardas,
kaj la homoj ja mortontis.
Do mi ne povis ilin forlasi.
130 Tiel nun sen ia zorgo,
mi konfidas la gardadon
de l' homa mond' al la bravulo
vera, juna, kaj nun iras al Ĉielo.

Tiel rakontis vilaĝgarda dio, dio aĝa
(strigo) pri siaj faroj kaj iris
al Ĉielo, oni diras.

あとがき）今度のは知里幸恵著「アイヌ神謡集」の第七話コンクフ。行分けは同じ作品を弟の知里真志保が組みなおした「ユーカラ鑑賞」（小田邦雄と共著）によった。既に訳された神謡集の第一話と同様、フクロー神のvilaĝgarda dioとしての面白い魚、獣を神からのさずかりものと見る狩猟民族アイヌの宗教観念がよくあらわれていて興味深い。猶今迄に訳された作品につけるrimarkojにもとりかからねば、と思う。（星田）
なお冒頭0行としたKONKUUAは折返し（サケヘ）

La kanto, kion kantis
juna dio de la lupo pri si mem.
(HOTENAO)

1 Iun tagon enuante iris mi al maran bordon
kaj ludante vidis la vireton.
kiam iris li malsupren, tiam iris ankaŭ mi malsupren,
kiam iris li ja supren de rivero, tiam mi ja supreniris,
5 tiel mi malhelpis lian vojon ses da fojoj
supren aŭ malsupren; la vireto
diris kun ekkoleremo sia propra,
"Pii tun tun, pii tun tun !
Vi bubaĉo malbonbubo, se vi agas tian malicemon;
10 pri la nomo de ĉi promontoro por malnova kaj por nova
trafe vi divenu !"
Mi aŭdante kaj ridante
diris tiel.....
"Kiu scias ne, la nomon de la promontoro por malnova
15 kaj por nova.
En antikvo estis respektindaj dioj, homoj;
oni nomis tien promontoron `Dia promontoro !.
Sed nun tempo estas ja kaduka,
oni nomas ĝin `Inaŭa* promontoro´.
20 Mi klarigis, kaj tuj diris la vireto.
"Pii tun tun, pii tun tun !
Vi bubaĉo vere diris tian;
do la nomon de rivero por malnova kaj por nova
plue diru !
25 Tion aŭdis kaj mi diris.
"Kiu scias ne, la nomon de l`rivero por malnova
kaj por nova !
En antikvo tempo respektinda,
ĉi riveron `La tolenta riverego´
30 oni nomis, sed nun tempo estas ja kaduka,
oni nomas ĝin `La lanta rivereto !"
Mi eksplikis, kaj tuj diris la vireto,
"Pii tun tun, pii tun tun !
Diras vi ja vere tian;
35 reciproke ni klarigu pri mi kaj vi la devenojn !
Tion aŭdis kaj mi diris.
"Kiu do ne scias pri deveno via !
En antikvo Okikirmuj** iris monten,
li konstruis ĉaskabanon, kaj li faris forno-kadron el la alno.
40 Sed ĝi tre sekiĝis pro la fajro,
Okikirmuj piedpremis unu randon, do alia rando

supreniĝis, tio kolerigis Okikirmuj,
li la kadron alportante al riveron
ĝin forĵetis.
Jen la kadro flosis laŭ la fluo,
iris fine al la maron; foraj ondoj tiuj ondoj de la maro
frapis batis rompe kadron: Tion vidis dioj,
ke la manfarita aĵo de la respektinda Okikirmuj, tiel
senutile drivis vane kaj putriĝus kun marakvo;
estus domaĝe ! Do la dioj faris
fiŝon el la kadro. kadro-fiŝo
estis do nomata.
Sed neniu scias la devenon de la kadro-fiŝo,
do ĝi sin metamorfozis por la homo,
tiu kadro-fiŝo estas vi mem."
Mi eksplikis, la vireto ŝanĝis la mienon,
li aŭdante tion, kaj li diris
"Pii tun tun, pii tun tun !
Vi ja estas eta knabo de la
lupo."
Finis vorton tuj li plonĝis en la maron !
Postrigardis mi ĝin, ke la unu ruĝa fiŝo
naĝis en la maron movigante la naĝilon,
for lontane.

Tiel li rakontis, juna dio de la lupo !

Trad. AIZAWA Haruo

* inaŭ: aina vorto: preparita el ligno, rabotinte kaj rabotaĵon bele aranĝita; oni oferas al dio.
**Okikirmuj: Li estis eminenta homo, prudenta kiel dio, varmkora kaj kuraĝa. Legendoj pri li estas tre multe tradiciitaj.

Oni asignis al mi la tradukon de ROTENAO el la jukara libro nomata "Sin-jo-ŝu". Do mi prove tradukis ĝin en la ritmo de trokeo. Sed la elfaritaĵo estis tre fuŝa. Bonvole sciigu al mi, por plibonigi la propozicion.
Mi elkore dankas al S-ro Kodama, kiu afablis por korekti la vortojn kaj donis al mi tre bonan konsilon.

H. Aizawa

S-RO NORDVENTO KAJ S-RO SUNO
el "Futuraj Fabloj de Ezopo"

orig. HOŜI Ŝin-iĉi
trad. HUŜIMI Ŝoĝi

S-ro Nordvento kaj S-ro Suno diskutis. Ili ree kaj ree insistis respektive, ke unu estas pli forta ol la alia. Ili apenaŭ memoris, ke iam antaŭe ili faris ĉi tiun diskuton, sed ambaŭ havis ne tiel bonegan memoron kaj jam forgesis, kiu el ili venkis. Mi estas pli ŝatata de virinoj. Mi estas pli forta en maĵao. Tia estas ĉiu diskuto.

Baldaŭ la regulo por la matĉo estas decidita. Estis viro paŝanta laŭ la vojo. Kiu povas demetigi de la viro ties jakon.

"Nu, ni provu. Unue mi faros."

S-ro Nordvento fervore per sia tuta forto blovas al la viro sur la vojo. Energie por deŝiri de li la jakon. Pro la malvarmo la viro tremas. Kaj ĉirkaŭrigardante li trovas drinkejon.

"Ho, tre malvarme. Donu iun trinkaĵon varman," diras li fluge enirinte, tieaj gastigantinoj afable gastigas lin.

"Bonvenon, sinjoro. Mi pensas, ke nia servo tute kontentigos vin."

Nenio alia estas pli bona ol la servo kaj varmeco en ĉi kazo. Kaj lastatempaj gastoj nenion rigardas kiel servon, se la gastigantinoj apenaŭ kaŝas sian korpon. T.e. en la ĉambro sufiĉe da varmo. Post nelonge la viro ŝanĝas la mendon al malvarma trinkaĵo kaj eĉ demetas de si la jakon.

"Nu, vidu mian kapablon! Nun, S-ro Suno, estas via vico. Provu!"

S-ro Nordvento bonhumora diras. Sed ankaŭ S-ro Suno ne volas esti venkita. Atendante la viron elirantan el la drinkejo, surmetantan la jakon, li komencas sendi la sunradion. La viro suprenrigardante murmuras.

"Kia vetero! Ĉu la malboniĝo de la socio donas influon eĉ

al la vetero?"

Pli ardiĝas la sunradio. Plivarmegiĝas. Viŝante ŝviton la viro ĉirkaŭrigardas kaj eniras kafejon. Kiel vi antaŭvidis, la konkludo estis, ke tiu kafejo estis bone malvarmigita.

LECIONO: S-ro Suno, ne bedaŭru. Baldaŭ la socio refoje ŝanĝos kaj venos la tempo, kiam en varmegaj tagoj oni demetas sian jakon kaj en malvarmaj tagoj oni surmetas la jakon. (FINO)

* *

KANTO DE MARIMO (Marimo no uta)

trad. HUŜIMI Ŝoĝi

1. Sur la lago iras vent' kun soleca kri'.
   Apud montoj de Akan sur la lag' de l'Di'
   la flosanta marimar', kion pensas vi?
   Marimar', ho, marimar'; verdas kara marimar'.

2. Vi jen flosas sur la lag' en la bela tag'.
   Vi kaŝiĝas en la lag' en la griza tag'.
   Vi lamentas pri la am', pri la trista ag'.
   Marimar', ho, marimar'; ploras kara marimar'.

3. Pri l'restanta histori' trista sen fortun'
   en aina la vilaĝ' eĉ ankoraŭ nun
   kantas verda marimar' en malgaja ton'.
   Marimar', ho, marimar'; verdas kara marimar'.

RIM: marimo = rondalgo, pilkalgo aŭ aegagropila.
Bonvolu INFORMI al mi, kiuj estas la POETO kaj la KOMPONISTO. (c/o S-ro SAŬAJA Juiĉi/SAWAYA Yûiti/)

ユーカラの翻訳についての提案

昨年6月末、東京に転出したS—ro関尾から、次のようなユーカラの翻訳活動についての具体的提案がありました。また、何人かのひとから、この提案についての返答、ユーカラ翻訳についての意見が寄せられていますのでここに紹介します。（Red.）

5—an de Jan. /973

Esiimataj Geamikoj!

今までLeontodoをはじめ、いろいろと送つていただきありがとうございます。その御礼と、N—ro44を見ると新しい方も何人か加わつた様子HELの体質改善を期待して、小生もカンバしないといけませんね。受け取つて下さい。

現在の仕事は、農業開発、農地計画等のコンサルタント業です。淡々とやつています。札幌にも行きたいのですがどうも北海道の仕事が担当できなくて残念です。入社してやらされた土地は、福島県、大分県、沖縄と南の方にかたよつています。新年から休む間もなくまた大分県です。「アイヌ神謡」のエス訳も札幌にいるあいだにもつと取り組んでおけばよかつたと後悔しています。序文は昨年やつとのことで仕上げましたが、その他残りの部分、全体をどのように統一するか、等等HEI—anoj の進行状況が殆んど不明です。東京のGe—sroj Iŝiguro も期待していますよ。S—ro Mukai にももつと首を突込んでいただきたいです。批判のみでなく本当の実践力としてお願いしたいんです。一度S—ro Sawaya にTELして状況を聞きたいと思います。日を決めましよう。/月22日のP.T.M 9:00 以降いかがでしようか？。S—ro Hoŝida からの連絡によるとさつぱり進んでいない様子ですので私が一つの提案をします。これに対してHEI—anoj のまとまつた意見や今後の具体的進行などをS—ro Sawaya から代表していただき、お聞きしたいと思います。

/ 今までに翻訳ずみの部分

☆ 序　文　　関尾

☆ 銀の滴降る降るまはりに　　墨田

☆ ハイクンテレケハイコシテムトリ　　山賀

☆ サムパヤ　テレケ　　山賀

☆ トーロロハンロクハンロク　　浦本

☆ 此の砂は赤い赤い　　星田

☆ カツパレッレウカツパ　　関尾

☆ トヌペカランラン　　関尾　　以上です。

2 残りの部分の担当を少々強引なようですが（こうしないといつまでたつても完成しそうにないので）、また各自生活のための忙しい仕事を持つていますから、その合い間をぬつて合理的に物事をすすめる意味でも

～☆～☆～☆～☆～　　～☆～☆～☆～☆～

ここで、S—ro Sekioは、まだ手のつけられていない残りの6つのユーカラの翻訳作業分担の候補者をあげています。編集局に寄せられた返事をもとに、RedaktoroがS—ro Sekioと1月22日電話連絡した結果は次のとおり。

☆ トワトワト　　那須

☆ ハリックンナ　　相沢、児玉

☆ ホテナオ　　関尾

☆ コンクワ　　星田

☆ プトイカマトマ　　？

☆ クツニサクトンクトン　　山賀

～☆～☆～☆～☆～　　～☆～☆～☆～☆～

参考テキストその他、全般的助言　　星田、早川

大体の方針を決めながら各自1日15分でいいから毎日続けて下さい

3 翻訳の全体統一

☆ 訳文体のスタイル統一　　星田

（専門用語、注釈の統一も兼ねる。）

☆ 訳語　・文章などのまずい点是正

・語学的に　　星田

・アイヌの視点に立つてよくないと思う所　　向井

4 その他

イ 知里幸恵さんの紹介

附の　・知里幸恵さんの夢（金田一京助）

・幸恵と真志保（荻中美枝）

・著者年譜・系図（藤本英夫）

また　・アイヌ神謡集を書いた知里幸恵のこと

（藤本英夫　道新70年6月8～10連載、同封コピー）

などを適訳して彼女の紹介をする。

ロ　アイヌ民族の紹介（エス語）

・歴史、文化　全般をまとめる　　向井、早川　？

ハ　世界のエスペランティストへ贈る

この翻訳事業の意義　　関尾

ニ　推せん文をいただく役　　関尾

藤本英夫、本多勝一、横澤忠夫、石黒彰彦さん等を考えていますが

その他適任の人がいたら教えて下さい。

ホ　出版の礼儀として、荻中美枝さん、藤本英夫さんに我々の仕事の意

・義とか許可など（弘南堂書店も含めて）を話したり得たりする役

高橋さんか向井さん引き受けていただけませんか。

以上です。

Sekio Kenji (en Tokjo)

自宅TEL　03～945－1687

112　東京都文京区大塚3－21－2

向　井　豊　昭（日高）

ユーカラ翻訳についてのお手紙いただきました。関尾さんからは年賀状をいただき、そのことについても話されていたのですが、ついつい御無沙汰しております。

わたしにあてられた役ですが

◎　「トワトワト」の翻訳について

アイヌ語も知らず、エス語の力もあまりないわたしには、これはどうも荷すぎます。人手がたりないのでしたら、短いユーカラを勉強のためにやってみてもよいのですが、HELにはもっと有能な人がいるはずですし、これはどうもミス・キャストでしょう。

◎ 訳語、文章の是正について

語学的に堀田さんが是正すれば十分だと思います。

◎ 歴史、文化全般をまとめることについて

わたしは7年余のアイヌの子どもたちとの関係を通してしかアイヌを語ることができません。もし、それでよかつたならば、わたしはこのことについてエス語でまとめてみたいと思つています。しかし、わたしはむしろ、わたしなどより永戸良一さんにこのことをやつてもらうべきだと思うのです。HELの仲間の中で、アイヌ問題を心の奥底から担つているのは、おそらく永戸良一さんただ一人でしよう。

◎ 浜中さん、藤本さんなどへの諒解のとりつけについて

お二人とも、わたしは面識がありますが、メテマエとしてHELの責任者がお願いすべきものでしよう。

わたしの役については以上です。全般的な意見としては、この事業が「学術資料的」な紹介ではなく、Esperantisto にふさわしい、人間の問題として築きあげられるものであつて欲しいと思います。そして、そのことに関する討論がひどくあいまいなまま今まで過ぎてきてしまつたのではないでしようか？　関尾さんは翻訳事業の意義を書き出版物に載せる用意があるようですが、それはHELの会員が内面化していることなのでしようか？　わたし自身、関尾さんがどのような意義をつかんでいるかよく知りません。それを知らないうちに自分にあてられた役をあれこれ言うのは間違つているのですが、いささか妥協をしてこんな手紙を書いてみました。（1月13日）

※　※　※

早川　昇（小樽）

拝復　その後は失礼に打ち過ぎましたが、御状により、益々御元気にEsp運動に関する御企画をなさつて下さつている御様子、よろこびにたえません。有りがたい事に思います。が、今回は、切角のお申越しですけれども小生は、自身の健康状態や、その他の都合から、残念ながら、お加えいただく事ができません。どうか、悪しからず思召して下さい。唯、ここにちよつと申し上げて置きたく思いますのは、推せん文の筆者としては、御自

身エスペランチストでもあられる高倉新一郎博士にもお願いになられましては、という事です。きつと喜んでお引き受け下さる事と思つております

なお、小生などは何にもお役に立てぬとは思つていますが、何かの民俗事象について御疑問の出ました節には、御遠慮なくか申出下さい。但し、4、5月は不在ですが。　　拝　具

アイヌ民話・ユーカラほんやくの今後について

屋　田　　淳（苫小牧）

S—ro関尾からの年賀状に「今年はアイヌ神謡の訳を完成させましよう皆にハッパをかけて下さい」とあつて、昨年来この問題についてもやもや感じていたことを、はつきりさせてみたい。

まず現状。民話から数編、アイヌ神謡集（知里幸恵著）の神謡13篇のうち7篇が訳され、昨年のLEONTODOに出たあと、S—ro関尾が東京で序文を訳しただけで作業は中断されている。（現在報告がないので）私もその後まだ手をつけていない。迷いが出て来たからだ。他のtraduk—antoj も、もしかするとそうかもしれないが——　LEONTODO N—ro 46 で S—ro 稿本と私から出された問題点が、traduka grupo の中で話し合われず、人の移動もあり、大会でも話しができなかつた。主な問題点をもう一度あげてみる。

1　Tekstoの形について

神謡集の原文のかき方（日本語文も同じ）は、ユーカラの正規のかき方（息つぎによる行わけ）になつていない。しかし、現状ではこれによつて訳するしか仕方がない。

（JES）　私も数人のアイヌ文学者にあたつてみたが、神謡集のなかのユーカラの原形（リズム付き）又は録音は今のところ見つかつていない。やむを得ない。神謡集をもととした自由訳でよい。

（NE）　やはり国内、外までに知られることを意図する以上、充分な手をつくしたい。

2　ESP訳の形について

今までの訳は各人各様に自由に訳されていて、日本式にいえば、散文詩の形である。形の上で統一されたものがない。ＥＳＰ詩では定形詩が一般的だが、rimo はともかくとして、ritmo を考えているのは、S—ro 池本のだけだが、現在も今後もこの形で行く他ないか。

（ＪＥＳ） 定形詩が幅をかしているのは ESP—UJO ぐらいで、前時代の遺物を時代の pioniro たるべき我々がいつまでも大事がつている方がおかしい。

（ＮＥ） やはり、現在のＥＳＰ詩としても読まれやすい形が望ましい。確かにもあるが（例えば rimarko など）いちばん大きいのは、上の２項と思う。ひとつみんなで考え、方向をきめて、とりかかりたい。

自分の考えをのべさせてもらうと、ＪＥＳよりもＮＥの方に傾いている つまり、もつと慎重でありたいものだ。しかし、よるべき資料が充分でなく、我々の kapablo としても、どの程度までやれば、という見極めをつけてならば、やむを得ない。実は昨年来、目を通した本のなかに、アルゼンチンの民に亡んだパンパの生活者ガウチョの詩 Martin Fierro とフインランドの民族伝説詩 Kalevala があつた。双方とも充分に吟味された訳詩で、Kalevala の場合、その特徴といわれる aliteracio（頭韻）の感じをＥＳＰに移すためかなり苦労のあとがうかがわれる。ひとつの民族が何百年または千年にわたつて伝えて来たものを扱う態度は、そう軽々しくていいとは思わない。

もかし、迷いながら結局数カ月（いや半年ばかり）無為にすごしたのはやはり怠慢だつたし、ハッパをかけられて当然と思う。

S—ro 関係提案の割当て方式について

私の以上の問題点について意見がまとまり、ではやろうとなれば、こうする他ないと思う。多くの参加を期待する。自分の分担については意欲を持つてやるが、アイヌ民族紹介、ユーカラなるものについての説明も、やる気はある。皆と力を合わせてやりたい。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

今までしらべたところでは「アイヌ神謡集」の作品の録音はなく、リズム、フレーシングを知ることは出来ない。しかし、知里博士が最後に出した「銀の滴降れ降れ」の形は「ユーカラ総覧」（私の原本）の形なので、

これを tekstoとして確定したい。（ESP訳は暫時除する。）
"Tanota hure hure"も同じ。"konkuwa"も prova traduko にかかるが、tekstoの吟味が必要かも知れない。実はこれよりも、似た内容の「ニゾイメチの女神の神嚇」（ユーカラ鑑賞）が魅力あるが、原文が見つからないので、後まわしにしたい。

※Rimarko：「ユーカラ鑑賞」知里真志保・小田邦雄著
初版本は1956年版、1968年潮文社（東京都新宿区市谷田町3—29）より新書版として発行されている。
定価320円（Red.）

郭須博文（札幌）

S—ro Sekioの提案には賛成します。非力ながら協力するつもり。思いきってやらなければ、何をも成し得ない。盛田さんがいるなら、僕の出る幕がないみたいだが。（1993年1月13日）

Jus aperis....

「知里真志保著作集」第1巻
¥3,200　（神謡・説話編）
ユーカラは最新対訳。　平凡社刊
その他 著者が各方面に発表した論文・解説を収録。
強き方は本屋さんへどうぞ。

◎「産新」の記事によれば 藤本英夫氏が知里幸恵の伝記を執筆中か。最下出版社を探しているとのこと。

La klarigo de ĉinaj vortoj

Laŭ la peto de s-ro, H. Aizaŭa, s-ro, Ĝ. Takenaka ĉefperanto en japanio de "El Popola Ĉinio" sendis al li sian manuskripton pri La klarigo de ĉinaj vortoj kaj li bonvolis aperigi ilin sur "Leonĉodon".

Jen estas tri partoj en ĝi; 1) Propraj substantivoj en la Aldono al n-ro 12, 1972 de El Popola Ĉinio. 2) Administraj Dividoj de Ĉinio. 3) Klarigo por ĉina kalendaro 1973 kaj aliaj.

(redak. H. Kodama)

1) Propraj substantivoj en la Aldono al n-ro 12, 1972 de El Popola Ĉinio

Ĝoŭ Enlaj, ĉefministro de la Ŝtata Konsilantaro de la Ĉina Popola Respubliko.	周恩来国務院総理
Kolekto de Ĉu Ci Ĝi Ĝu.	楚辭集註
Ĝi Pengfej, ministro de ekstèraj aferoj.	姬鵬飛外交部部長
Liaŭ Ĉengĝi, Konsilanto de la Ministerio de Eksteraj Aferoj kaj prezidanto de la Ĉina-Japana Amikeca Asocio.	廖承志外交部顧問 中日友好協会会長
Interpretistoj Lin Lijun kaj Vang Hiaŭhian.	通訳 林麗韞 王効賢
Je Gianjing, vicprezidanto de la Milita Komisiono kaj vicprezidanto de la Nacidefenda Konsilantaro	葉剣英中国共産党中央軍事委員会副主席 国防委員会副主席
Guo Moĵuo, vicprezidanto de la Konstanta Komitato de la Tutlanda Popola Kongreso kaj Honora prezidanto de la Ĉina-Japana Amikeca Asocio.	郭沫若全国人民代表大会常務委員会副委員長 中日友好協会名誉会長
Ĝou Gianĵen, vicprezidanto de la Konstanta Komitato de la Tutlanda Popola Kongreso.	周建人全国人民代表大会常務委員会副委員長
Ding-maŭzoleo de Ming-dinastio.	明代の定陵
Vu De, ĉefkomitatano de la Revolucia Komitato de Pekino.	呉德 北京市革命委員会主任
Makiaŭ-popolkomunumo de Ŝanhajo.	上海市郊外の馬橋人民公社

Vicministro Han Nianlong. 韓念龍外交部副部长
Vicministro Ju Sang. 于桑公安部副部长
Giang King. 江青
Jaŭ Venjuan. 姚文元
Li Hiannian. 李先念
Gi Dengkuj. 紀登奎
Li Deŝeng. 李德生
Vang Donghing. 汪東興
ĈPLA.(Ĉina Popola Liberiga Armeo) 軍隊

2) Administraj Dividoj de Ĉinio.

Urboj rekte sub La Centra Registaro:

Pekino(Ĉefurbo de la lando,en Hebej-provinco)
Ŝanhajo(en Giangsu-provinco)

Provincoj kaj Iliaj Ĉefurboj

Anhuj	安徽省	Hefej	合肥(ホーフェイ)
Fugian	福建省	Fuĝoŭ	福州
Gansu	甘肅省	Langĝoŭ	蘭州
Gianghi	江西省	Nanĉang	南昌
Giangsu	江蘇省	Nankino	南京
Gilin	吉林省	Ĉangĉun	長春(新京)
Guangdong	広東省	Kantono	広東
Gujĝoŭ	貴州省	Gujjang	貴陽
Ĝegiang	浙江省	Hangĝoŭ	杭州
Hebej	河北省	Tiangin	天津
Hejionggiang	黑竜江省	Harbin	哈爾濱
Henan	河南省	Ĝengĝoŭ	鄭州
Hubej	湖北省	Vuhan	武漢(漢口)
Hunan	湖南省	Ĉangŝa	長沙
Junnan	雲南省	Kunming	昆明
Kinghaj	青海省	Hining	西寧(シーニン)
Liaŭning	遼寧省(大連州)	Ŝenjang	瀋陽(奉天)
Siĉuan	四川省	Ĉengdu	成都(チョントウ)
Ŝandong	山東省	Ginan	濟南
Ŝanhi	山西省	Tajjuan	太原
Ŝenhi	陝西省	Hi-an	西安
Tajvan	台湾省		

Aŭtonomaj Regionoj kaj Iliaj Ĉefurboj:

Aŭtonoma Regiono de Interna Mongolio 内蒙古
Huhehoto 呼和浩特

Guanghi-a Ĝuang-nacia Aŭtonoma Regiono 広西チワン族
Nanning 南寧

Hingianga Ujgura Aŭtonoma Regiono 新疆ウイグル自治区
Urumĉi 烏魯木齊

Ninghia-a Huj-nacia Aŭtonoma Regiono 回族自治区
Jinĉuan 銀川

Tibeta Aŭtonoma Regiono(en preparado) 西蔵
Lhasa ラサ

3) Klarigo por ĉina kalendaro 1973.

Jan. Mateno en Lasao(Lhasa) ラサの朝(チベット自治区)
Feb. Printempo sude de Jangzi-rivero 江南の春色(揚子江)
Mart. Pluveto super Oŭgiang-rivero 雨に煙る瓯江(浙江省)
Apr. En Ava-montoj アワ山の風景(雲南省)
Maj. Nokto de Petroloraffinejo 精油工場の夜景(北京)
Jun. Naĝbirda lageto de Hangĝoŭ 西湖の水鳥館(杭州)
Jul. Dianĉi-lago de malproksime 滇池の遠望(雲南省)
Aŭg. Patrolado ĉe landlimo パトロール中の辺境守備隊
Sept. Sur la Suda Maro 南海の漁船(広東省)
Okt. Riĉa rikolto de vinberoj ぶどう収穫(新疆ウイグル自治区)
Nov. Pejzaĝo de Ligiang-rivero 漓江のうぶね(貴州省)
Dec. Bejhaj-Parko en Vintro 冬の北海公園(北京)

P.S.

Ansaj-gubernio 安塞県
Ajvan 愛腕亭
Ĉahar 察哈爾
Dadu-rivero 松河、松江
Ginggang-montaro 井岡山
Ava-montoj アワ山、阿佤山
Bejnaj-parko 北海公園
La Ĉina Murego 万里の長城
Gongga-monto 近郷貢嘎山
Ginggangŝan 井岡山
Gjuzi-insuleto en Hianggiang-rivero 湘江橘子洲
Guangdong(Kantono) 広東
Jan-an 延安

Huangŝan-monto	黄山	Juelu-monto	岳麓山
Jangzi-rivero	揚子江	Ki Bajŝi	齐白石
Ĵen Ŝaŭking	任少卿	Ligiang-rivero	漓江
Luŝan	庐山	Sima Kian	司馬遷
Ninghia	寧夏	Ŝi Gi	史記
Tajŝan	泰山	Tang Jun	唐雲
Ŝaŭŝan	韶山	Tian-anmen	天安門
Tigra Monto	威虎山	La montaro Vutaj	五台山
Tianŝan-montaro	天山山脈	Vuhia-montogorĝo	巫峽

***** ***** ***** ***** ****** ***** **** ***** ****

Rememoro
pri
Tutlanda Kunloĝado, la plej prospera

Araya Tomiko (Najoro)

Antaŭ kelkaj tagoj mi partoprenis la tutlandan Kunloĝadon en Yaizu. Ĝi donis al mi multajn ĝojon, suferegon kaj kortuŝon. Tie mi multe parolis en la japana lingvo, mi parolis malmulte en Esperanto kaj mi kantis esperantajn kantojn.

Oh, tre ĝoja!

Ĉiuj homoj parolis , sed mi estis .

Oh, mi tre soleca! La suno en Yaizu brilege brilis. Iam mi promenis sur marbordo. Tie ni lernis Esperanton, ni parolis en Esperanto, kaj ni manĝis kukojn kaj dolĉajn fragojn de Sizuoka. La maro de Yaizu estis blua kaj klara.

Nun mi estas sola en mia ĉambreto, mi rememoras la Kunloĝadon en Yaizu. Mi deziras partopreni ĝin ankaŭ en la venonta jaro.

Ni iru al Yaizu en majo!

(1973.5.18)

雑感

清水　寛（札幌）

先日、何気なしに、Neĝflokoj（以下ＮＦ）の綴を本箱から取り出して、頁を繰つてみた。ああ、あの同人紙か、と思い出される方もいるんじゃないかと思いますが、昨年の４月以降に私たちの仲間になつた人たちには、何のことかわからないと思うので、一応の説明をしてみましよう。

ＮＦ紙は１９７１年２月に創刊された、全道規模の小雑誌で、ほぼ月刊を守り、６号（７冊目）までは連絡紙として機能していました。現在、道内の有志がユーカラのエス訳をすすめていますが、その端初となつたのが４号（５冊目）の池本盛雄氏の「アイヌ民話のエスペラント訳について」という文章でした。この呼びかけに、５号（６冊目）は特集の形で諸氏の意見が発表され、既に連絡紙としての存在を、はるかに離れたものになつていました。６号において、第３５回北海道大会（苫小牧）の報告が為されていますが、同大会の議題の一つに、ＮＦ紙のＨＥＬ機関誌化が取上げられ、熱つぽい議論がたたかわされ、結局は、事務局側の取下げで幕となつたことが述べられています。そこでカットなつたのが、僕たちＮＦ紙の編集にあたつていた者たちでした。現実にＨＥＬの機関紙として機能してきたＮＦ紙を認めず、しばらく休刊になつているLEONTODO紙を選ぶのか！？　大会参加者＝読者が反対するのなら、もう連絡紙として機能しようがないんじゃないか？　では、ということで誕生したのが同人紙としてのＮＦ紙。これは７号（通巻８冊目）から最終号（１１冊目）まで４冊発行されましたが、同人数１２人で、書手が４、５人、残りは読み手と、同人紙としての機能を全うできず、解散した、というのがあらましです。

さて、０号（１冊目）の巻頭に無署名論文が載つているが、内容がいいので、今一度、連盟の会員諸氏に読んでもらうため、長くなるが、全文を引用したい。僕の記憶に誤りがなければ、筆者は現事務局長の沢谷氏です。

機関紙活動を強化しよう

７０年代は情報化社会。組織にとつて、内部での意思の疎通がなければ単なる個人の集合と同じだ。コンクリートになる前の砂と砂利みたいなも

の。7／年は機関紙活動にも十分に力を入れたいものだ。もちろん書き手はあなた自身だ。機関紙というからには、いつもいつも会員を増せ、あれをしろ、これをしろなどと四角ばつたことばかりわめき立てる記事を載せなければならないということはない。全くその反対だ。各人すきなことを思つていることを自由に書けばよい。かだそれだけでよいのだ。そうするうちに、おたがいの間に相互作用（interago）が生じて、／⊕／＞2という結果が生じる。あるいは自分自身のエスペラントの力をつける修練の場だと考えてもよい。まあ各人が機関紙に対して、何か自身にとつての意義を見出せば、それで結構。あとはどんどん書きまくればよい。機関紙には執筆者と一方的な読み手という分化対立した関係は否定さるべきものであつて、もしそうであるとすれば、それはもう機関紙ではない。

0号の発行は7／年2月／日だから、もう2年も経つたことになるが、この小輪の持つ意義は、2年後の今日、増々重大なものになつている。7／年／0月L誌44号が発行され、72年／2月20日発行のL誌48号まで／年が経過した。しかし、その書き手は、とみるや、外観の充実に反し、未だ少ない。書き手が増えると苦労するのは、タイプを打つてくださる北島さんである。そう考えて、何も書かないというのであれば、エス文で書き送つてはどうですか。現在、札幌では少くとも／0台の欧文タイプが遊んでいるはずですから。

また、以前、N紙を編集（といつても、ガリ切りと印刷程度）していた経験からいつて、原稿が多く、ガリ切りに苦労した時が一番嬉しかつたものです。きつと、北島さんも同じだと思います。北島さんに負担をかけないようにするには、原稿は横書原稿用紙に楷書体で丁寧に書くことです

ラ・モバードなどの活版の機関誌に投稿するのでしたら、気おくれがするかも知れませんが、幸い、L誌はタイプ一写の機関誌です。気楽に書いてみてください。

雑感とか随筆とかいうものは、引き延そうと思えばいくらでも長くなるものですが、逆に短かく書き上げるのは、とても難しいものです。ここまでで既に5枚程使つてしまい、北島さんには申し訳ありませんが、もう少し書かせて下さい。 E 63 ページにつづく →3

エスペラントのすすめ

60号記念特別寄稿

細井 求 夫（八鹿）

この文は、1965年9月27日発行の「ライブラリー」（八鹿高校図書館機関誌）に一般高校生を対象として書稿したものである。

「アジアは一つ」と岡倉天心は叫んだ。しかしそれから幾十年、戦雲はベトナムに、印度に立ちこめている。まさに世界は一つでなければならない。

口に平和を囁き、自由平等を叫んでみても、われわれは実際にそれを実現する土台石を一つでも積み重ねているであろうか。今から78年前ザメンホフは、人類がお互を理解することなしに平和はあり得ないと、国際語エスペラントを示したのであつた。

私どもの祖先は「言霊の幸はう国」と日本の国を讃えた。日本語によつて、お互いがよく理解できる喜びをいつたことばである。今日の人類の不信と争いは、ことばの不通が、どんなに大きな原因となつているかを考えてほしい。ベトナム人の血をはく思いの救いを求めることばを、自分の国のことばで聞いたなら、果して何人のアメリカ兵が彼等を惨殺できるであろうか。ことばが通じないままであるならば、たとえ通じたとしても征服者のことばを被征服者が使つての伝達であるならば、たとえ平和があつたとしても、それはいつわりであり、うわべだけの平等である。

世界に孤立した日本語を話す日本人が世界人類のためになし得る一番大きな贈り物は、エスペラントで理解し合おうと声高らかに主張することである。

いつわれわれの頭上に投下されるかも知れない原爆をやめてくれと言うのに、英語、ロシア語、フランス語、中国語で叫ばなければならないとは何たる不幸であろう。明日の危険をさけるために、今これらのことばで大声をあげることは大切である。しかし明後日の平和のために、「われわれの気持を理解してほしい。そして、みんな同じ人間なんだ。犬やねこを撲殺するより気軽に他民族を大量虐殺することをやめよう」と平和を希願する者のことばエスペラントで呼びかけようではないか。

この8月1日から1週間東京では約50国から1710人のエスペランチストが集つて第50回世界エスペラント大会を開いた。そしてたつた一つのことばで心ゆくまで語り合つたのである。素晴らしいことではないか昨年のオリンピックもよかつた。しかし、これが一つのことばで運営され参加者がこれで語り、観覧者がこれで聞き、このことば一つで全世界に中継放送されて、国語への翻訳なしに世界の民族に理解されたらどんなに、素晴らしかつたろう。

きつとその日は来る。来させなければ人類は殺し合いによつて自滅してしまうだろう。若い諸君は夢をもつて、希望をもつて、「世界は一つ」と心から喜び合える日のために、今日からこのことばの学習を始めてくれ給え。そして新らしい仲間をふやして行こうではないか。八高エスペラントゼミナールは諸君の先輩の輝かしい努力の一頁であつたのだ。

↘ [61ページよりつづく]

71年1月から72年3月まで、NP紙が発行されていた間は、結構忙しかつたけれども、その間の自分のエスペラント運動への係わり方だとかエスペラント運動をどう見ていたか、などということが、記録されていて懐かしい気持や、恥かしい気持がする。日記帳というものをもう4、5年もつけていないのだけれど、少くともエスペラントについては、習い始めた頃からの記録（ビラや各種機関紙二手作りのものに限る）が残つているので、日記がわりになつている。小学生の日記じゃあるまいし、一日一日の出来事をつける気にならないから、ということは、特に記録すべき出来事があつたり、感ずるところがあつた時にのみ書く、ということを意味するので、自然と三日坊主になつていくんじゃないだろうか。そこで、機関誌の効用は、一種の日記としてとらえることができると思う。

これまでに、L誌や他の機関紙に投稿している方は、自分の書いた物を読み返してごらんなさい。また、新しい何かを得られると思いますよ。

北海道大学 エスペラント運動

私たちがここに提案する"北大エスペラント運動"は、私たちの活動を単なる研究におわらせないで、行動に発展させることを基本の方針としています。

文化の支柱であり、日常の生活の中で主役を演じている言語は、今日の動揺する世界にあって、決して安泰ではありません。外国の文化を知るためにという目的で、教育にとり入れられた英語が、日本人をこれほどアメリカ人に対して卑屈にしてしまったこと、同じアジアの人と意志を交換するために、ヨーロッパの言語の助けを借りなければならないこと、ベトナム語――フランス語――英語による二重通訳のパリ会談、国勢の増大にともなったロシア語、中国語の進出、常に抑えつけられる小民族の言語、これらは、私たちに判断をせまり、無意識の道具としての言語から、意識された武器への脱皮を要求します。

私たちは、この言語、文化、民族の問題に対して大胆にぶつかり、私たちの主張を文化の自由と平等を求めるエスペラント運動と結合し、エスペラントを活用して、行動に移してゆく決心をしました。素朴なヒューマニズムから発した疑問、中立の国際語エスペラント、この二つの結合が何を生みだすか、私たちにはわかりません。
しかし、この運動が積極的な行動を失なわないならば無駄に終わることはないと信じます。

君の参加を強く許します！

北大エスペラント運動の創出へむけて。

再度 訴える

現在、大学立法、そして70年安保をめぐるぼくたちの意識の高揚にともなって、ストライキあるいはデモ、封鎖などが連続的あるいは散発的に行なわれてきた。ぼくたちはそれを肯定的に評価し、さらに前進を求める。同時に、この場にあってまだねむりつづけようとする人たちに対してはきびしく告発し、自覚を求めなければならない。

だが諸君、ぼくたちはここに、君たち自身もねむっているのではないか、とたずねよう。大学と社会における政治的、経済的矛盾を君はするどく指摘した。ならば、なぜ文化的矛盾をも暴露しようとしないのか？ あの根源から発した矛盾のひとつの側面としての政治的、経済的矛盾ならば、それが言語、文化的にもあらわれていることをなぜ放置しておくのか？ たいしたことではない、と君はいうかもしれない。ぼくたちは回答えしよう、そのたいしたことのないものも帝国主義のひとつの補見をなしていること、そしてたいしたことあるかないか、は状況によってはげしく揺れ動くことを。

社青同のLSYのバッジ、社学同のSSLのヘルメット、そしてロシア語で記された落書きをながめるとき、ぼくたちは彼らもやはりねむっていることを知る。

エスペラントで書けば満足なんだろう、と君は皮肉な目をむけるだろう。ぼくたちは少しも満足しない、それが問題意識を含まない、目新らしさを追っただけのものならば。

「Nova Japana Literaturo」とエスペラントで書名を記した「新日本文学」という雑誌がある。英語はありふれている、フランス語も見あきた、じゃエスペラントで、というこの発想をぼくたちはがまんできない。おもしろそうだから、という理由でヘルメットをかぶりゲバ棒をふりまわすのと少しもちがいはしない。

エスペラントを知り、そして使うことはほかの外国語の知識を用いるのと同じではない。ぼくたちはこの国際語と民族語のちがいを知り、体験的に確かめようと思う。

多く使われているだけでは国際語ではないことを。英語を使ってかまわないじゃないか、という主張は、アメリカのかさの中にはいっていればじゅうぶんだ、という考えと同じ質のものであり、また日本語だけにとらわれて外国の文化を軽視する行き方も日本の再軍備の道と通じるものがある。

だから君、帝国主義はその中に文化的側面をもっていることを知らではないか？

ぼくたちは、この言語帝国主義を告発するために立ち上がった。彼らの武器がヘルメットやバリケードであるならば、ぼくたちの武器はエスペラントだ。

再度訴える、エスペラント運動を創出しよう。

反言語帝国主義の一環として

エスペラント運動！

君との一みのべ式にいえば一対話をぼくたちは今必要としている。君もそうじゃあないか？

エスペラントの象徴はみどりのほしです。★

10－1969

エスペラントについての4の視点《GDHB》

ES－VADO de HU
〈北大エスペラント運動〉

ぼくたちわこれからエスペラントの世界にはいっていくのだけど、その前に、君がエスペラントに求めるものわなにか、あるいわ、君わどのようにエスペラントにかかわっていくのか、ということを考えてみる必要があるかもしれない。もちろんそれわ、これ以降も考え続けていかなければならないし、また君がエスペラントと交流していく中ではじめて確立していくことだろうけど、今の君わどうなのか、これを確めておこう。そうしないまま教科書をひろげようとするならば、君わ必ずいつかあらわれる困難を前にして脱落していくだろうから。

エスペラントわことばである。しかしただのことばでわない。でわどう《ただでない》のだろうか？（以下《エスペラント》をEと略すけど、必ず《エー》とよんでほしい！）

1. Eわ《学問》である

Eわ言語である。すべての言語がそうであるようにEもまた研究材料となりえる。しかもEの場合にわ《人工語》という観点からも追究できることが貴重である。つまり、人間の思考体系と文化がどのように形成されていくのか、そもそも思考体系わどんな要素から構成されるのか、それと人間の心理との関係わどうなのか、などのことが他の場合のように

ぼんやりとした過去のことでなく、現在観察可能なものとしてあるし、さらに実験さえ追求できる。なぜなら、Eの誕生からこれまでの記録わすべて人類の手の中にあるのだ！
もうひとつ、語学としてあの未知のものに対するあこがれにも似た感情をいだいて、また人工語ということについての興味をもって、ぼくわEの入門書を手にとった。

2. Eわ《道具》である

1. 外国の切手と絵はがきを集める者にとっていちばん手軽な方法わ外国のんと文通することだが、そのためにあのむずかしい外国語を習うほどのこともないだろうと思っていたが、Eというやさしい《国際語》のことをきいた。そのEでことばのはいった切手もかなりあるとか。機会わのがすべきでない。
2. 夢にまで見る外国旅行だが、気にかかるのわことばとお金。ことばならEをやればいいという。学びやすい上に《国際語》でかなり多くの人が話せるようだから不自由しないだろう。おまけにEの組織世界E協会にわデレギート網というものがあって現地のE-イストを知ることができるが。E-イストわ身内のように歓迎して、ホテルの世話をしたり、自宅にとめてくれたりするのでずっと安く旅行できるそうだ。一石二鳥でわないか？
3. 教養として身につけたいものわいろいろあるけど、あまり実利を求めるようなものわだめだし、みんなが知らないもの、つまり変っているとみられるものもやはりいけない。けれどもちろん新鮮さわあったほうがいい。その意味

でわ《お茶に お華に おエス》といわれるEわぴったりだ。国際化がさけばれている現在、エイ語ほど実用本位の感じもしないし、教養として花よめ修業のひとつとしてちょっとやってみようか？

3. Eわ《橋》である

現在 世界にあふれている憎しみ、戦い、疑い、非和解的な対立 ― これらを解消することわできるだろうか？
しかしぼくたちわ気がつく、それらのうちかなりのものが、誤解、そしてたがいに相手を理解しようとする態度の欠如から生じていることに。無知がどれほど本来和解的なものを非和解的にしていることだろう。
まさにこの点に立きゃくして、ぼくたちわ ― そしてザメンホフわ ― 国際語を追求しているのだ。
ことばが通じないことから生じる多くの不快わ、逆に共通のことば ― 特にそれがどちらか一方だけに属するものでない場合 ― が、ぼくたちのまわりによびおこす静かなよろこびを思わせる。学問の世界でも他国の文献のための外国語の学習の強要。外国のまちにおりたったとたん それきり完全に無言の世界におとしこまれることの苦しさ。外国でおこったことを そこの政府の御用マスコミを通してしか知ることのできないもどかしさ。外国の人と話し合えないこと。意見を交換できないこと。これらをとりのぞくよりも ほかの外国語を学ぶことでがまんすべきだろうか？ 否！ たとえばエイ語をみてごらん。国際語だといっても話せる人わどれだけい

るか、まわりをみわたしてみたまえ。国際化した世界に住んでいるのわ そんなわずかな人だけなのか？
そして、ぼくたちが学んだところで、アメリカに1、2年住みでもしないかぎり 彼らと対等になど話せるだろうか？
なぜ日本語とエイ語のうちでエイ語をえらばなければならならなかったのか？ フランス人と話すためにわどうする？ エイ語わもうだめじゃないか。そんなにいくつもやれるというのか？
せまくなったといいながらも その地球上のぼくらのすぐとなりのこともわからないで つんぼさじきにおかれている。
ぼくたちが求めるのわ そんなごまかしの国際語じゃない。
ぼくたちわEを知った。これ以外のなにが国際語でありえようか？
あとひとつ残る問題として、Eを知る人間が少ないということ。それわぼくたちが活動していくことによって解決されるだろう。そのためにぼくわEを学んでいる。

4. Eわ《武器》である

ぼくわ抑圧されている。社会がこのような形をとっているとき そこにわ抑圧者と被抑圧者だけが存在する。もちろん、それわ国境をこえて、国と国の間においても同様である。
その支配の網わ政治的、経済的にだけでなく文化的にもおろされており、ぼくがその支配から脱しようとすることをはばんでいる。政治経済的網が外からの圧力としてあるならば、文化的網わ内からの圧力＝ぼくに支配、

に反抗する気をおこさせないための支配なのだ。その中心をなしているものとして言語がある。それが思考の核であり、人と人の交流のかぎであるために。支配者わ圧倒的少数であるがゆえに——多数ならばなぜ力でおさえる必要があるだろうか？——、なによりも支配されている巨大な大衆の自立と連帯をおそれる。

古くから征服者わ被征服者から固有のことば——思考と文化をうばい、自分のことばをおしつけた。神主の国イギリスわインド人に対してそうだった。義理と人情の国日本わ朝鮮人に対して。平和の戦士ソ連わ東ヨーロッパに対して。自由の番人アメリカわ全世界に対して！—— 当然にも支配からの脱却わ自分のことばをとりもどすことからはじまった、ときにわ偏狭にも思える民族主義の形で。国というものの内部においてもまさに同様であった。

そして現在問題になるのわふたつ。国際化したということばのもとに説かれる国際語——エイ語の必要性

しかし、ぼくわここにも従来の図式を見る。《カタコト英語でもじゅうぶんです》というような本がでているようだが、これこそ支配の論理をはっきりいいあらわしているものである。エイ語を話す日本人わ必要だ、でもカタコトでいいのだ——それ以上にならなくていい（アメリカ人よりじょうずになったらこまるものね。エイ語はあくまでも彼らのものなんだから。）6年やっても10年やっても話せなくて、多くの者わあきらめかけている。そうなってわまずいので、元気づけようというわけだ。どっちみち日本人が日本という場にいるかぎりそんなにエイ語を吸収できるわけがない、ことわだれでも知っているのだ。

だからこそ そういう中途はんぱな、アメリカ人と日本人の間に立ってくれる弟子を養成しようとするのだ、アメリカの権威のもとにひざまづき、その権威をたてに日本人を見下すような。
西のほうでも ロシア語をもって同じようなことをやっているようだが。——とわいっても国境をこえた交流わどうしても必要なのだ、ぼくにとっても。

もうひとつわ ひとつの言語内部における抑圧。これわ形態としてよりも内容的にぼくの思考を枯らしていくものだけにうちやぶるのわむずかしい。自分のことばと自分の思考をとりもどすためにわどうするのか?

これらに対する方向性わ共通のものとしてみいだされる。ぼくのまわりの、そして遠くの被抑圧者との連帯を求めること。ぼくのことばで話しかけ 彼のことばで聞かせる。彼のことばで話されたことを ぼくのことばで聞く。ぼくたちのことばで話し合う。どこかの組織のように《中央》からの知識をうけとるのでなく、自分の耳で聞く。知らないから、ということばで逃げるのでなく、自分が知ろうとする。そのためのものとして Eわある。

だれのものでもないから それわぼくのものだ。だれのものでもないから彼のものだ。だれのものでもないから ぼくたちのものだ。そういうEわすでに抑圧者の文化的支配の網を切り落としていく ぼくたちの《武器》にほかならない。

これ以外にも視点わあるだろうし、上の4がこれでじゅうぶんというわけでもない。ましてそのうちのどれかと君に選択を強いるようなものでわない。ぼくたちわ多かれ少なかれこれらのうちのい

くつかをあわせもっているだろうが、焦点をむりにしぼらなければいけない性質のものでわない。君がどの《ぼく》であろうと、それわ君の主体の問題だ。ただ、ぼくわ君が現時点における君自身の視点をはっきりさせておくことを求める。そして、なにかの困難の前に君がエスペラントをすてることがあっても、それをエスペラントのせいにしないでほしい。エスペラントわ君だけのものでなく、ぼくのものであり、彼のものなのだから。

〈Kaoco Mugika, 6-10-1969〉

《追加》

Eの多くがヨーロッパ語からきていることわ事実だけど、そのことをあまり強調しないほうがいいと思う。それわ、ぼくたちのEに対する視点をEと無関係な方向にむけてしまうおそれがあるから。《Eわヨーロッパ諸語のよせ集めだ》という視点！ もしそうだったら、そのEがアジア人のぼくたちにどういうかかわりをもちえるのか？ 単語の類似を学習のとき利用するのわ当然だけど、それわあくまでも便宜的なものであって本質でわないことを忘れてわいけない。そうでないと、Eが《国際語》であるということわやはり幻想にすぎないのだ。《Eわなに語に似ているのか？》という問を許してわいけない。Ĉu ne?

K. M

言語学序論

〈国際語の本質と将来〉なん大げさにやりましょうか、あるいわ

わたしはやるから君もやれ！

となになに連みたいにわきの下をくすぐりましょうか、まあそれわ君が決めていいのです。

そもそも大学に顔をみせるような連中わたいてい平凡であることを貧くためにこのコースをえらんだ人間か、反道徳的なになにを求めてはいりこんだか、どちらかに相場がきまっています。ここでわ前の方にわ心苦しいけれど御遠慮していただくことにして後の方にだけいいことをおしえてあげましょう。

それわ、なにをかくそう エスペラント なんです。英語がある、やれロシア語（あるいわF、Dつだ、漢習だ、これでもう満腹です、なんてのわこどもの風下にもおけないやつですね。こんなふうに外国語（＝民族語）をいくら数多くやってもことばの問題えの根本的方向にわなるわけかない。これわ単一の共通語をおくことによってはじめて可能になるのだ。よし、エスペラント運動に加わろう……という人がいたら決がでるんですかねえ。

〈北大エスペラント運動〉

Esperanto-Movado,
de Hokkajdo-Unuo

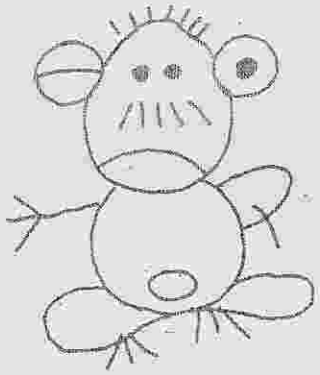
Jen Kato

mi scias Esperanton Njarome!

‖(日本語訳)

エスペラント知っているぞ ニャロメ!

Lia nomo estas "Njarome" Jen Rano



Vi devas Lerni Esperanton

‖日本語訳

ゼヒ エスペラントを学ぶべし

Lia nomo estas "Besi"

1970年4月
札大エスペラント運動のビラの中より

?-1971

君の国際語を 今つかもう！

教育大および駒沢大のみなさん、

オリンピックを前にいやでも目につきはじめた問題があります。"ことば"の問題です。同じ人間でありながらたがいに話し合うことのできないこの地球上の諸民族がせめて見い出そうとあつまってくるオリンピックには人間同志の理解、ふれあいは不充分にしか実現されません。そのことは、結局オリンピックを民族の友情のためでなく、民族間の競争のためのものにしてきました。

ことばは、ごくありふれたものだからささいな問題であると見られやすいけれど、ことばの壁を知ったものにとってこれほど一見喜劇的でしかし大きな悲しい障害はないのです。通訳をいくら動員してもその効果についてあとあとまで議論が残るのは、それがこの問題をわきから通り抜けようとしたものだったからです。

事実を直視しましょう。そうしたらだれにも平等な共通語の実現がさけられないものであることがわかります。エスペラントを生活の中で育てていきましょう。ぼくたちはその先頭に立つものです。

連絡を待っています。お早目に。

"岩見沢学生エスペラント会

エスペラントを今こそ、今ならおそくない。

学生である時間を無駄にはすごすまい。

1-1971

講習会　お知らせ

何の講習会？――ESPERANTOの！

次の各項にあてはまる方はぜひどうぞ！

1. 大学生活がつまらない人
2. 何か大きい事をしたい人
3. 英、独、仏、露語に飽きたらない人
4. 英、独、仏、露語を難かしいと感じた人
5. エスペラントが何か知らない人
6. 昨夜徹夜した人
7. 語学の嫌いな人
8. これを読んでいる人
9. 自分を美男美女だと思っている人
10. お金と暇をもてあましている人
11. 酸素の有難味を知っている人
12. 札幌のラーメンを美味しいと思う人
15. 数字がとんでいるのがおかしいと思う人
16. これを書いたヤツの顔を見たいと思う人

待ってるヨ！

毎週金曜日午後6時から
クラーク会館の集会室にて

主催者は北大エスペラント運動

新入会員募集中!!　特にやる気のある人を

Amo de hamanaso

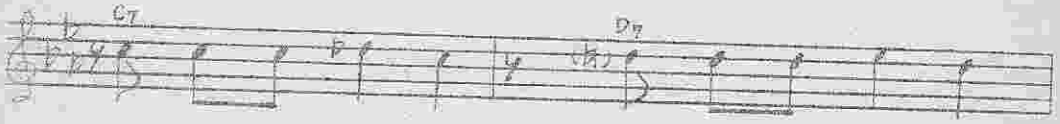
(Hamanásu no koi)

poez. TAKAJANAGI Koŭ
muz. SAIKI Masao
trad. HUŜIMI Ŝoĝi

1) An- kaŭ flo-roj de ha-ma- nas' de-fa-lis
2) Post la flo-roj de ha-ma- nas' ka-ŝi-ĝas

jen. I- li es-tas nun de la pluv' fra-pa-taj plu.
mi. Jen fi-gur' de vi, pro be-daŭr' la-men-tas mi.

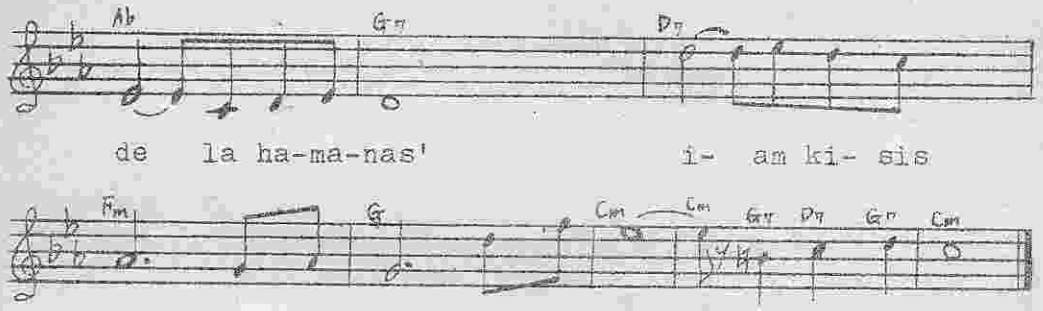
Es-tas la ta-go, ki-am ed-zi-ni-ĝas ŝi _____.
Dol-ĉa la kan-to so-nas tre mal-ga-je nun _____.



Pro kor-do- lo- ro, pro kor- do- lo- ro,
Pro ne- dor- me- bla, pro ne- dor- me- bla,

mi- a voĉ', mi- a voĉ', raŭ- ki- ĝas
lon-ga nokt', lon-ga nokt', ek- ĝe- mas

ĝi _____. Al l'a-ro-mo de l' flo-roj
mi _____.



はまなすの恋

一. はまなすの　花もこぼれて
降る雨に　ぬれているのさ
あの娘の　嫁ぐという日
悲しさに　悲しさに　声も　声も　かれるさ
はまなすの花の香りにくちづけの
白い　白い　うなじよ

二. はまなすの　かげにかくれて
おせび泣く　君の姿よ
想い出の　歌もせつなく
眠れぬ　眠れぬ　夜の　夜の　ためいき
はまなすの花の香りにくちづけの
白い　白い　うなじよ

KOREKTO

En "Kafejo en studentokvartaro", mi faris gravan mistajpadon, pro kio mi vian pardonon petas.

Bonvolu korekti jene:
(la 2a strofo)
ili kirliĝis tiam → tiam ili kirliĝis
(Huŝimi S.)

ENHAVO

1. Rilate al "Ruĝverta Gruo .....Inoue H. 1
2. Iomete pri la 4a Ataka Plano...La Revulo O..3
3. 連盟年次総会報告 5
4. 北海道エスペラント運動史の覆刻について..... 相沢治雄...6
5. ザメンホフの生地とアリストクについて.....trad. 江口正元...8
6. Ĉirkaŭ Portlanda UK .....A. Hoŝida...12
7. エスペラント展の報告（函館市）.....16
8. 緑色聖書 ..... Malseri O. .20
9. 全道巡礼 23
10. 山中代議士海外にうま張する ..... 山崎慶雄....24
11. ひとこと.....K. Kimura...26
12. Esperanto kaj mi..... ...27
13. EL MIA LETERKESTO 29
14. INTER NI.....37
15. Elementa lernejo en organo.....Hamada K....39
16. Dio Strigo prikantas sin, Konkuŭa
.....trad. A. Hoŝida.41
17. La kanto, kion kantis juna dio de la lupo
pri si mem (Hotenao) .....trad. H. Aizawa.45
18. S-ro Nordvento kaj s-ro.Sumo.....
.....trad. Huŝimi S....47
19. Kanto de marimo .....trad. Huŝimi S....48
20. ユーカラの解説についての覚書..... 明尾寛司....49
21. アイヌ民話・ユーカラ解説の今後について..... 豊田 準....53
22. La klerigo de ĉinaj vortoj.... Takenaka G..56
23. Rememoro pri Tutlanda Kunŝoĝado, la plej
prospera.....Araya T.....59
24. 雑 感 ..... 清水 豊....60
25. エスペラントの手引 ..... 細井栄夫....62
26. 活動の記録（写真）.....63
27. Amo de Hamamaso.....trad. Huŝimi.....78

編集後記

1973.6.6

◆ 50号は80ページに達したのが明らかの記念になるのではないかと思われています。49号の分があるからです。個人的の方に、今までのLentodoをふり返って、感想を依頼しましたが、メ切までにはありませんでした。八雲の熊谷さんに特別寄稿をしていただいたのと、1969年から71年にかけて名大学でまかれたビラの中から、活動の記録の意味をも含めて、ここに収録しました。

◆ 函館の三石 清さんの「孤島」のとうり、49ページに載っている大会のprotokolの中、S-ro三石の誤植を訂正してください。

◆ ごらんのとうり、エス史で書かれたものは、編集メンのさぼりでも、タイプ書打ちが可能なのですが、原稿は余裕をもって早めに送ってください。紙幅も多くの中、時間をさいて打ってくれているのですから。

◆ 次号は北海道大会関係の記事中心

LEONTODO n-ro 50 1973年 7月 7日発行

発行所 北海道エスペラント連盟
060 札幌市中央区南2.西4. 中央タイピスト学院内
TEL 251−4750
振替口座 (小樽) 17075

編集 沢谷雄一
tajpis Kitabatake
manskribis Aoki R.